

祈月書院報

第39号

2022年10月25日発行

発行所 公益財団法人 祈月書院 発行代表者 安部 明廣

| | |
|---------------------|--------|
| 巻頭文 特集 — 書院の広場へようこそ | 1～2面 |
| 特集 | 3～33面 |
| 2021年度秋季研修会報告 | 34～38面 |
| 編集後記 | 39面 |

特集 — 書院の広場へようこそ

祈月書院の歴史は太平洋戦争を前にした昭和9年（1934）に松江市上乃木に創設された寺子屋まで遡る。それから数えて間もなく90周年を迎える。昭和20年（1945）の敗戦を機に日本は民主主義国家に生まれ変わった。旧寺子屋出身の塾生達の「教育に関わり続けたい」という熱意によって昭和40年（1965）に再開された奨学育英プログラムは、社会環境の変化に応じて、初期の10年とは全く形式を異にする。多くの財団と違って、志が先あって資金は後から工面されるという、言わば草の根風の出発であった。今日的な表現を使えば、発想の根底には地方創生という願いが込められている。

この第二期のプログラムも、試行錯誤を重ねながら、いつの間にか半世紀を超える足跡が残っている。次第に学生数も増え、事業の形も安定した昭和51年（1976）、学生諸君の提案を受けて始まった一泊研修会は、その後も踏襲され、定着した。昭和54年（1979）には、児玉治利理事（故人）の助言を受け、全国に散在している祈月書院関係者の連携を図るために、足立潔氏（現理事）、堀江振一郎氏（現諮問委員）の努力で祈月書院報が創刊された。

平成25年（2013）には、新法の施行により、公益財団法人祈月書院に衣替えした。公益法人の認定作業を通して、祈月書院報は、本院の広報と同時に、日頃の活動への外部の評価を受ける窓口の役割も担うことになった。しかし限られた紙数で果たせる役割には限度があり、このような改革により、書院報発刊の動機となったOB・OG関係者を繋ぐ情報誌という役割が手薄になったことは否めない。書院報の内容については、絶え間ない見直しが必要である。

折しも創立90周年の節目に、ここまでの歩みを総括し、設立の理念（定款）に照らして検証を行う作業が始まろうとしている。祈月書院は出会いの場であり、書院報は交流の広場でありたいという原点に戻って、今年の書院報39号では、書院の活動を支える重要な母体であるOB・OG関係者集団とは何かを問うてみることにした。

コロナ感染症の勃発を受けて、書院報37号、38号のコロナ特集では外部有識者に加え、幅広い職業、年齢層にわたる関係者の寄稿を集め、海外も含めてコロナ時代の体験を文書に残すことができた。寄稿依頼が相次ぐことになるが、39号はコロナに囚われず「日頃頭に去来することを自由な表現で」と浴衣掛けの寄稿を求めた。先行の書院報37-39号に稿をお寄せ頂いた関係者を合わせると、寄稿者数は延べ40数名にのぼる。書院報が祈月書院の活動を支える広場としての役割を果たしている証として心強い。

しかしこれで満足しているわけには行かない。日本の民主主義をもう一歩の高みに導くためには「積極的に議論を楽しむ文化」を育て、「タコソボ文化」（丸山眞男）からの脱却を図る必要がある。人類の歴史の中で「広場」が果たしてきた役割を思い起こそう。フランス革命のコンコルド広場、天安門広場、近くはキーウの独立広場など、時に熱気をはらむ場所でもある。書院の広場にOB・OG関係者が集い、「人と社会」（個と全体）を熱く論じ合う日がいずれくることを心から願っている。祈月書院の奨学育英プログラムの成否はそこにかかっている。

文責 安部 明廣

書院報39号にご寄稿頂いたOB／OGの方々（年度順）

| | |
|------------------|--------------------------------------|
| 中林 日出美（横田S40年卒） | 「祈月書院と私 ― 今に思う」 |
| 山崎 茂（松江北S42年卒） | 「志木の頃の思い出」 |
| 多久和 祥司（松江北S46年卒） | 「都市に住む祈月書院OB・OGの郷里、島根との関わり方」 |
| 児玉 卓郎（松江南S46年卒） | 「祈月書院」 |
| 熊野 嘉郎（松江南S46年卒） | 「回顧『私の50年』」 |
| 足立 潔（松江北S47年卒） | 「祈月書院報に新しい息吹を」 |
| 堀江 振一郎（松江南S49年卒） | 「核兵器や原発事故で命を落とす人のない世界」 |
| 実重 重実（松江北S50年卒） | 「1978年の祈月書院から現在の世界を展望する」 |
| 由木 文彦（松江北S54年卒） | 「退職して考えること」 |
| 森脇 喜紀（松江南S58年卒） | 「動物から人への臓器移植の開始 科学の発展への期待」 |
| 小田 亜紀子（松江南S60年卒） | 「『多文化共生』雑感」 |
| 福間 浩（松江北S62年卒） | 「現代における宗教の在り方」 |
| 火原 彰秀（松江北H3年卒） | 「アカデミアに身を置いて」 |
| 梶谷 早知（松江東H11年卒） | 「『近所のフツーのおばさん』―冒険遊び場あじっこパークでの実践の日々―」 |
| 錦織 亜希子（松江南H18年卒） | 「花束贈呈で遭遇した悔しさと後悔」 |
| 林 克起（松江南H18年卒） | 「新型コロナウイルス感染症第7波にあたって」 |
| 高橋 達充（松江北H18年卒） | 「『規範』の使い方について」 |
| 内田 誠治（松江北H21年卒） | 「人口減少社会と『学び直し』」 |
| 井後 雅博（松江北H23年卒） | 「学士編入という選択肢」 |
| 一ノ渡 真行（出雲H28年卒） | 「秋夜懐顧」（詩） |
| 金井 貴佳子（松江北H29年卒） | 「背中を押してくれる言葉」 |

祈月書院と私 ― 今に思う

農業(横田S40年卒)

中林 日出美

私は祈月書院の寺子屋出身の皆さんと現在の奨学育英プログラムの皆さんとの中間期の祈月書院生として、前理事長宅の書生部屋で起居し、主に農耕を通じてご指導いただき、私にとっては心身の鍛錬と学びの場でした。現在は喜寿を迎える隠居の身で、もっぱら健康維持のため北アルプスの陽光を浴びながら安曇野のリンゴ農家の手伝いをして体を動かしています。

社会に出た後も本を読み、学び続けることの重要性を感じていました。今は理事長から毎年秋に届けていただく祈月書院報が私にとって貴重な学習の冊子となっています。国際情報から心持ち方まで幅広く学ばせて頂き、変転極まりない現代を生きることを考えさせられています。同時に祈月書院の皆さんとの間に絆のようなものを感じて心が満たされる思いです。

人生百歳時代を乗り切るには、常日頃の心身の鍛錬(体を動かす体力作り)と知恵を磨くための学びや思考(学習=認知症対策)、そして食育が基本だと感じています。備えあれば憂いなしで、今のところ詐欺やフェイクなどなどに惑わされることもなく、心身ともに健康で平穏に過ごさせて頂いているのは祈月書院との出会いの賜物と今更ながら感謝しているところです。

昨今の世相に思うこと

世界が温暖化、核や原発、さらには新型コロ

ナなどさまざまな問題に直面しているこの時代に、あり得ないと思っていた国家間の戦争、虎の威を借りる何とかではありませんが、核使用をも仄めかし、さらにはエネルギー供給の制限等々、残忍非道な振る舞い、法や人権を無視する恥ずべきロシアの行為には只々啞然とするばかりです。世界が権威主義的な陣営と民主的な陣営に分断され、すべての国がどちらかに属するか選択しなければならなくなっていくのか？緊張が高まる混迷の未来の到来が避けがたい様相に憂慮が絶えません。

このようなとき洪沢栄一(1840-1931)の晩年の言葉が思い出されます。「科学の進歩から戦争を昔日よりも二重にも三重にも激烈惨たんならしめております。一国の利益のみを主張せず政治経済を道徳と一致せしめて、真正なる世界の平和を招来せん事を、諸君と共に努めたいのであります」。

科学教育と人間教育

科学技術の発展と人間のモラルが両立するような社会を作らないといけない！そのためには、そうした教育がいかに重要かを改めて認識するところです。どんなに対立が深くても、最後まで英知を絞って話し合いを続ける努力をして、持続可能な地球と平和な世界の再構築に向けて物事が進んでくれることを願うばかりです。



祈月書院史出版記念会(霞が関ビル1991年)(筆者前列中央右隣)

志木の頃の思い出

(松江北S42年卒)

山崎 茂

私が奨学生に採用されたのは第二世代の育英事業が始まった昭和40年代（1965）初頭です。役員は第一世代（寺子屋出身）の方々を中心に、奨学生は松江北高校出身者数名に安部十二造理事長に所縁の方々の子弟である水橋、宮下、中林、加来さんらが加わっていました。

現安部明廣理事長時代に入ってからのごことは皆様ご存知と思いますので、当時のことを中心に若い方々に簡単に紹介しようと思います。

揺籃期の研修会

志木のお屋敷は東上線志木駅の近くにあり、書院造りの簡素な建物で約900坪の敷地内にあり、武蔵野の面影を残す山林と広い畑に囲まれていました。家の書齋には和綴じ本など多くの本が収められていました。庭では葉物を中心とする野菜や木瓜、ダリヤやバラ等の花を趣味で育てられていました。随分、写真も撮らせてもらいました。魚のいる池や農作業用の納屋もありました。犬や家鴨もいました。

当時は、研修会も今のように組織化されたものでなく、理事長宅で十二造先生を中心に旧寺子屋出身の長谷川、玉木、大野さんら在京の役員の方々に加わった懇談形式でした。参加者は役員と奨学生で10名強だったと思います。何度かは屋敷に料理人を呼んでご馳走をいただいたことも記憶に残っています。

その後、畑を手伝うようお声掛けがあり、月に1、2回、泊りで志木へ何うようになりました。素からじっくり育てる姿勢は奨学生への対応と通じるものがあるように思います。作業の合間には会社起業の頃のこと、これからは中国と仲良くしなくてはいけない（日中国交回復前です）、人生の三分之一を過ごす布団はいいものを使いなさい等いろいろとお話を聞かせてもらいました。また、畑で採れた新鮮な野菜も奥様の手料理で何度もいただきました。沢庵は大きな木樽で漬けた100%自家製でした。

安部十二造理事長のご逝去

昭和44年（1969）2月に十二造理事長がご他界になり、祈月書院は運営の中心が安部明廣現理事長に引き継がれました。



安部十二造理事長追悼の集い
昭和44年（1969）志木の前理事長宅にて
写真上 旧寺子屋出身の役員
写真下 新生祈月書院の奨学生

写真は同年夏に催された前理事長追悼の集まりの折に撮られたものです。役員は40歳前後、奨学生は20歳前後、揺籃期の祈月書院の雰囲気をご想像して下さい。

その後、現理事長がアメリカから帰国され敷地内に建てられたご自宅にご家族ともどもお住まいになりました。奨学生の人数が増えたこと

もあり、運営は奨学生が主体的に企画する研修会と書院報の発行という方向に改革が進み、現在に至っています。

あとがき

十二造理事長の奥様はご長女のト藏様宅に移られ、その後昭和47年（1972）に現理事長ご一

家も横浜の日吉へ引っ越されました。残念ながら、間もなく跡地周辺は朝霞市による開発が進み、新興住宅地へと変貌してしまいました。

振り返れば、日本はようやく戦後復興期、高度経済成長期を経て、安定成長期（乃至は低迷期）に差し掛かろうとしている頃でした。

都市に住む祈月書院OB・OGの郷里、島根との関わり方

「伊野やって未来こい!ネット」事務局長(松江北S46年卒)

多久和 祥司

九月は長月。満月が地表を照らす時間が最も長い月だそうです。月明かりで稲刈りをした思いがよみがえります。というわけで、西洋ではハーベストムーンと言うそうです。

みなさんは、どこでどんな月をご覧になっているでしょうか。ふるさと島根で見た月を思い出されることがあるでしょうか。

ふるさと島根への愛着を形にさせていただく提案をします。

近年、「関係人口」という言葉がまちづくりの分野で注目されるようになりました。都市に住みながら地方と関わっていく人のことです。交流人口と定住人口の間にいる人たちです。島根県は関係人口拡大に力を入れています。書院の持つ知的財産や人脈は、島根にとって底知れなく魅力的なポテンシャルです。

私が暮らす出雲市伊野地区は人口1,200人余の中山間地域。2030年には人口1,000人の村になると思われまふ。人口減に伴い、コミュニティの機能が麻痺し始めています。集落の協働事業の草刈に独居高齢者が悲鳴をあげる、地区の運動会に選手を出せない、消防団員を確保できない等々。カーボンニュートラル実現目標は2050年。その頃、いったいどのような島根・日本を想像すればよいのでしょうか。私は当地区のまちづくりを担う役目を拝命して10年になりますが、近年、着目しているのが「関係人口」です。活動の一端を紹介します。

耕作放棄地が増え、シカやイノシシがわが世

の春とばかりに跋扈し始めている当地区。去年から耕作放棄地をソバ畑に甦らせるプロジェクトを始めました。地区外・県外から20数名が参加しています。農業と縁の無かった人たちですが、地区の農業者・農地所有者が今後、農地をどうするかを考えるきっかけになってくれることを期待しています。

人口減に伴い空き家も増える一方です。3年前から、一軒の空き家を「大人がこそこそ(?)できる隠れ家」として活用する取組を始めました。家屋の改修、音楽会、調理教室等、多くのイベントが催されるようになりました。ここで出会った地区外の人たちが関係人口として、地区住民との協働プロジェクトをたくさん立ち上げるようになりました。プログラミング教室、高齢者のスマホ教室、子どもたちが石灯籠を作ってホテルロードに並べるイベント…。関係人口の方の一人が「私にとって伊野はミラクルが起きるパワースポットです」と言っています。人と文化が行き交う場所で、未来をつくる熱量が高まることを期待しています。

新しいコミュニティをつくっていくのは人です。地域を変えるためには一定の熱量が必要です。私は地温と呼んでいます。どんなにすぐれた種（提案）でも発芽適温に達しないと発芽しません。安部先生から「熱は分子（人）と分子（人）がぶつかる場所に生まれる」と聞きました。

提案

祈月書院OB・OGの皆さんが島根と関わることで島根の熱量を上げていただきたいのです。その関わり方（関わりしろ）は、皆さんの持ち味や地域の実情によってかなり幅広い選択肢・出番が考えられます。ふるさと島根との関わりを楽しむというふうを考えていただくことが一

番です。地域は日本の縮図です。世界ともつながっています。みなさんの経験や知見は多様な分野で大きな力を発揮することと思います。

行政の窓口（関係人口案内所）は島根県しまね暮らし推進課又はふるさと島根定住財団です。みなさんと島根の応答関係ができあがることを念じて止みません。

祈月書院

（松江南S46年卒）

児玉 卓郎

私が祈月書院の奨学生に至った経過については記憶が薄い。昭和45年、松江南高校3年の時、担任の先生からこんな奨学金制度があるがどうか、といったような話があり、祈月書院の何たるも知らず、軽い気持ちで応募し、審査書類を書いたような気がする。結果通知がどのように伝えられたのか、記憶が飛んでいる。翌年の祈月書院新奨学生は私を含め松江南高校の同窓生4名であり、皆顔なじみだったので安堵したことの記憶はある。先輩の奨学生はまだ少数だった。

奨学生は在学中2ヶ月に一度安部理事長のご自宅を訪問し、お話を伺って2ヶ月分の奨学金を頂くことになっていた。理事長のご自宅は最初は志木にあり、途中で日吉に転居された。訪問は緊張感を伴い、一人で伺うよりは、との思いで、同窓の熊野君と同行することもあった。祈月書院の活動は年2回の研修会が開催され、会場はKDD新宿会館や東京大飯店などであった。現在の研修会同様講師を招いて講演を聴くことが本来の趣旨であったが、不謹慎ながら栄養不足の学生にとって講演よりもその後の普段決して口にすることのできない豪華な会食が楽しみであった。まだ育英事業再開間もない頃で、奨学生よりも理事、評議員等の年配の役員の方が多く、研修会では小さくなっていた気がする。関係者名簿は2ページでも余白がある時代であった。

大学卒業後は東京を離れたこともあり、祈月書院との関わりは会報や名簿を拝見する程度だが、その後私と祈月書院との関わり合いがある

ことがわかった。

亡父が晩年回顧録を作っていて、その中に私の叔父が短期間ではあったようだが祈月書院に在籍していたことの記述があった。『弟は六年生を終わると松江の祈月書院に行った。ここは安部十二造先生による英才教育をするところで、弟も一年間は某和尚の下で塾生として暮らし、翌年から中学校へ通わせてもらうつもりであったと思う。（中略）ところがおとな達は、出してみたもののかわいそうで仕方がなくなってきた。そこで、祖母がどうしても承知しないという口実をつくって一学期のうちに連れて帰ってしまった』祈月書院史を読むと、年代的には寺子屋か祈月書院創立間もない頃かと思われる。いずれにしても私が在学中には知らなかったことであった。叔父がどうして祈月書院に入ったのか、父も叔父も既に亡くなり、その経緯を確かめようがないが、祖父が大正7年から13年間安部十二造先生の生誕地の阿井小学校校長を務めていたので、何らかの接点があったのかもしれない。

また、1991年に祈月書院史が刊行され、読み進むうちに私が生まれ育ったところの近くの竜の駒に、山林、田畑等を祈月書院が所有していたことがわかり、大いに驚くとともに、ほとんど何も分からず祈月書院に入り、奨学生として過ごした私ではあったが、後年少なからず縁を感じたものである。

縁と言えは歳を重ねるにつれ地縁、血縁、望郷の思いは強くなってきた。島根県に生まれ、

高校まで過ごし、大学は東京、その後は長野県で暮らしている。島根県よりも長野県での生活が圧倒的に長くなったが、心は今でも島根県人である。テレビで島根県関連の番組があれば、出来るだけ観るし、高校野球を始め、島根県代表の成績が気になり、応援もする。リタイア後、時間的にも余裕ができてきて、高校の同窓生に会えるようになり、当時の思い出に浸り、高校卒業後以来の友人の容姿の変貌と変わらないふるまいに接し、感慨深いものがある。コロナ禍でこの数年は会合が持てないのは70歳代になろうとしている我々にとっては辛いことである。

食べ物も生まれ育った島根の味を忘れることはできない。米は仁多米。秋になると一年分の玄米を送ってもらう。煎茶は松江のお茶屋からネットで取り寄せている。正月料理も出雲風が必須である。こちらの餅は四角い切り餅なので、丸餅を送ってもらい、雑煮は十六島の岩のりを入れた醤油仕立て。おせちには野焼き、赤貝は

欠かせない。私の生家は既になく、兄弟も故郷にはいないが、いところが何人もいて、郷土の味覚を送ってくれる。リタイア後は絆がより深くなって来た。

祈月書院は島根県出身者に対する支援により、「世に資する人物を育てる」ことが不変の目的であり、恐らく設立当初とは手法が異なっているが、現行の大学生が経済的援助を受けることができる奨学金制度は他に類を見ないものであり、私は感謝し尽くすことができない。在学中にもう少し祈月書院の思想、歴史を理解していれば良かったと後悔する。今でも安部理事長のお話、研修会での雰囲気は忘れることがない。果たして自分が世に資する人物であるかははなはだ疑問だが、祈月書院の関係者として設立の趣旨を踏まえ、誇りを持っていこうと思っている。今後とも祈月書院がその設立趣旨とともに引き継がれることを祈念して止まない。

回顧「私の50年」

祈月書院 評議員(松江南S46年卒)

熊野 嘉郎

半世紀余りも前の1971年、私は山陰松江の高校を出て上京してきた。

当時、日本に返還された直後の沖縄から、或いは博多、佐世保からベトナムへ出撃した米軍と隣り合わせに居た日本は紛れもなく戦争当事国とも言えた。1ドル360円の固定制から変動相場制への移行もあり大量生産、大量消費の高度経済成長期は先年の大阪万博をピークに下降線をたどり、また73年には第一次オイルショックによる狂乱物価騒ぎが起きるなど、大学生活を過ごした4年間はざわついた時代であったように思う。

その頃の私はと言えば、刻苦勉強には程遠く、これといった目的も見いだせず生きていた。元々高校時代には、医療関係できれば医師になるか、海外に出てビジネスをやりたいぐらいのチャランポランな将来展望しか持っておらず、指導教員を苦笑させていたぐらいだったので、大学入学早々進むべき道を見失っていたのであ

ろう。有難いことに祈月書院の奨学生に採用していただいたが、当時は今のような定期研修会は無く、2か月に一度奨学金を貰いに理事長宅に出向くことと、年1~2回の集まりに参加することだけが義務と言えれば義務ではあった。内容は詳しくは記憶していないが、「何のために生きているのか、どう社会に貢献するのか」と言った硬派の議論に巻き込まれ、単に意見を述べるだけでは許してもらえず、なぜそう思うのか納得できる説明を求められた。より深く物事を考えるよう仕向けられたのだろうが、その時だけは惰性の中で生きていた自分が、少しだけ前を向かされたような気がしたし、当然のことながらその後の思考法の助けにもなった。

会社に入る頃には「自分にやれることをやろう。どう社会に貢献したかは後で解るだろう」と棚上げする術を身に着けたが、先送りした命題は卒業後時折出席した祈月書院研修会でチク

りと刺すような感覚を呼び覚ました。

幸いなことに会社では上司や同僚に恵まれ、彼らは「私にできること」を辛抱強く引き出し、拡大してくれた。特に40歳を過ぎてから通算11年に亘り海外、それも競争の激しいアメリカではなく欧州に送り出してくれたことは私にとって大きなエポックとなった。欧州各国の歴史ある文化に触れたことは勿論、仕事以外の様々な事柄を議論する習慣に対応するため自分の知識を広げる努力もし、異なる意見や価値観を理解する場にもなった。帰国後、思いがけず系列の小規模医薬品会社の経営を任され、希少癌の治療薬開発に取り組んだが、海外の研究者やベンチャーと議論する際に、この経験は大いに役立った。退職後にはなったが薬事承認を得ることができ、日本の患者の為に貢献できたことは望外の喜びである。幸運にも、高校時代思い描いた医療関係と海外ビジネスの両方に携われた訳である。

半世紀を生きて思うこと

さて50年の月日を経て、世情を比べてみるとどうであろうか？ウクライナへのロシアの侵攻に加え、台湾海峡の緊張も高まっている。台湾の経済的、軍事的重要性を考えると中国共産党が狙うことは容易に理解できる。この機に乗じて勇ましく日本の軍備強化を唱える短絡的な意見も増えてきて、国として50年前以上に危険な

立ち位置に居るように思われる。また日本では自然エネルギーへの変換が遅れ、原油の供給を絞られると途端に苦境に陥っている。今のところ価格の問題で済んでいるが、奪い合いになる可能性も無いではない。

公害問題は気候変動問題に形を変えたが、世界規模の深刻な問題であることに変わりはない。更に2000年以降、周期的に現れるコロナ感染症の解決にも手を焼いている。

50年は、己の野心を武力に任せて解決しようとする人間の性を変えたり、有限のエネルギーを合理的／平和的に分配するシステム確立には短かすぎたようだ。今後の科学の進歩に向け引き続き努力することと共に、次世代を背負う方々と過去の経験を共有し、課題解決への道筋を模索することが必要だと感じている。

私も現役を引退して4年経つが、自由を謳歌できたのは最初の1年半だけで、あとは新型コロナ感染症で窮屈な生活を強いられている。そうした中で医療施設などから高齢者であることを理由に優先的に配慮される事例を見ていると、自分がそうになったら働き盛り世代を差しおく権利が有るのか迷ってしまう。それなら少しでも社会貢献をしておこうと思ったわけでもないが、半年前から頼まれて軽い仕事を引き受けることにした。ほぼ50年前に取ってそのまま放ってあった薬剤師免許を利用したところが、怠惰であった自分らしい。

祈月書院報に新しい息吹を

祈月書院 理事(松江北S47年卒)

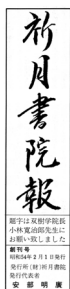
足立 潔

祈月書院報の創刊に向けた動きは、とりあえず先ずは出すこと、その後は続けるということから始まった、と思います。でなければ、私のような当時社会人なりたてのような者が編集担当などお引き受けする訳がありません。編集担当を断続的ながら一応果たしたと私が思っているのは第25号の頃までです。それ以後は…。

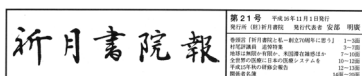
創刊から第20号まで

書院報の創刊は1979年2月1日でしたが、それから第11号が発行されたのが1994年6月1日。その間には出せるときに出す、といった感じで定期刊行物という意識はありませんでした。ただそうした状況の中でも発行が継続されたことに意味があったと思います。1995年11月1日付けの第12号以降は毎年1回ほぼ11月1日に発行されるようになりました。

なお、平成15年（2003）の第20号までの縦書きの「祈月書院報」の題字は堀江振一郎氏（現諮問委員）が双樹学院の（故）小林寛治郎先生（第6号に追悼文掲載）にお願いして揮毫して頂いたものです。第21号からの横書きの「祈月書院報」の題字は（故）玉木久光顧問（第38号に追悼文掲載）の筆になるものです。



第1号～20号



第21号～

書院報の題字—縦書から横書へ

創刊号から第20号までは原稿の執筆に留まらず編集にも奨学生、OB・OGが深く関わっていました。各号の編集後記の執筆者をみると、安部理事長や私以外に、堀江振一郎氏、実重重実氏、稲村博氏、数藤由美子氏、菊地依里氏、山田泰子氏、火原彰秀氏、持田陸宏氏のお名前があります。

第20号までは薄手の冊子でしたが、今になって読み返してみても中身はしっかりとしたものです。戦前に祈月書院で寝食を共にしつつ人格の陶冶に励まれた寺子屋世代の方々の見識、人脈が一つの支えになっていたようにも思えます。

最近10年ほどの書院報しかご覧になっていない方々が創刊当初の号を手にとると、同じ名前の冊子でもかなり違った印象を持たれることでしょう。創刊号から第20号までの書院報を纏めた冊子が平成16年（2004）2月に刊行されています。今やかつての書院報に触れたことのない方が多いのですから、この冊子の復刻版を考えてもよい頃かも知れません。

紙面の拡大—平成12年（2004）

第1号から第20号まではB5版縦書きでしたが、第21号からはA4版横書きのスタイルになりました。それはある年代以上になると小さい活字では読みにくいこと、寄稿いただく文章にもア

ルファベットや数字、数式の表記が多くなってきたことからです。その結果、巻頭言、一般記事ともに欧文の掲載が可能になりました。第31号からカラー印刷も取り入れられました。その結果、記事に含まれる図表、講演会や研修会開催時の写真などが見やすくなりました。

関係者名簿の掲載中止—平成25年（2013）

第1号から第29号までは関係者名簿が書院報とセットになって印刷されていました。世上個人情報保護の機運が高まる中で、書院報配布の際には取扱い注意の旨お願いしていましたが、祈月書院が公益財団法人に移行した平成25年（2003）の第30号からは名簿の掲載は中止することになりました。

第1号から第20号までは関係者名簿を除く本文のページ数は冊子当たり平均8.5頁（4頁～11頁）でした。関係者名簿の掲載を中止したにも関わらず、第30号から第38号までのページ数は平均38.7頁（28頁～48頁）となっており、大幅に増えています。このことは公益財団法人への移行認定に際して、書院報が日頃の活動の広報や外部からの評価を受ける窓口の役割を担うようになったことが関係していると思われます。公益法人化以前の書院報はOB・OG関係者間の交流を主要任務とする同窓会誌の趣があったかと思いますが、新しい任務が加わったことにより、奨学生研修会の報告もより詳細なものとなり、外部有識者からの招聘寄稿が増えました。内部の連携を図るとともに、外部の評価に堪える出版物であるための努力が続いています。

現行の編集体制

当然ですが、書院報の位置付けは、定款の趣旨に沿って役員会で承認されたものです。現在、書院報は編集委員数名で企画、編集を行っているような形をとっていますが、実際のところは安部明廣理事長に原稿依頼から編集まで大きな負担がかかり、原稿の校正を吉原理事そして印刷会社とのやり取りを私がやっている次第です。正直これ以上のご無理を理事長にお願いできません。

ですので、組織の機関誌として一定の条件はありますが、今後書院報を原点に立ち戻って改革していくにはどうしたらよいか？を考えるこ

とが、喫緊の大課題です。書院関係者全員とは
言いません。この挑戦解決に知恵を出したいと
いう有志の方々の連絡をお待ちしています。

書院報の45年を俯瞰して

今回の執筆に当たって、創刊号から第38号ま
で全巻を改めて読み返してみました。あくまで
個人的感想ですが、書院報との距離感に公益法
人化前と後で違いがあるように感じました。現
在の祈月書院報はクオリティーペーパーのよう
な感じで、かつての書院報のような身近さは感
じられません。

現在の名簿にある関係者はほぼ全員がかつて
のまたは現役の奨学生です。昨今現役奨学生が
書院報に登場するのは、3年生で幹事を務める
秋の研修会報告の1回だけです。かつては奨学
生に採用されたときとか就職や進学が決まった
ときにも文章を載せたりしていました。そうい
う記事を見れば、どのような人が奨学生になっ
たのか、どのような将来を目指しているのかな
どが、OB・OGにも伝わる筈ですので、研修会
などで出会った際には接点を持ちやすくなるの
ではないでしょうか。

現在の書院報の編集担当は役員に限定されて
おり、残念ながら若い人の視点が欠如していま
す。私が多少なりとも書院報の編集に携わった
と思っている時期は20代半ばから40代後半まで
です。今更ながら寺子屋世代の先輩方や様々な書
院創立時の関係者と交流を持てたことは私にと
って他に代えがたい経験だった、と思っています。

今後の編集体制への提案

ですので、現在編集中の書院報第39号の発行
終了後、直ちに第40号の準備に向けて編集委員
会補強のためのオンライン会議を開催したいと
思います。この会議は、広く書院報の課題解決
に協力したいという方々を募り、協議の上、20
代から40代までの新たなメンバーも含めた新編
集委員会を立ち上げることが目的です。編集委
員会に新しい風を吹き込むことが、これからも
祈月書院報を継続して発行していくための一歩
に通ずるものと考えます。

再度のお願いです。書院報の抱える課題解決
に知恵を出したいという有志の方々の連絡をお
待ちしています。何卒よろしくお願いします。

核兵器や原発事故で命を落とす人のない世界

祈月書院 諮問委員(松江南S49年卒)

堀江 振一郎

今年、核兵器の使用について大国の大統領
が威嚇する発言をして、世界を震撼させた。2月
に始まったロシア軍によるウクライナへの侵攻
は、8年前のクリミア併合とは様相を変え、激
しい戦闘となって今も続いているが、その中で
早々に核兵器の発言まで出たことは、これまで
になかったことで、極めて大きな驚きであった。

広島

私はいわゆる被爆二世で、母が12歳で女学校
1年生だった時、広島市内で爆心地から3キロの
所の学校で、朝の教室の掃除中に被爆してい
る。校舎の窓が吹き飛ばされて、母は手の指に
怪我をただけで幸い済んだという。校長先生

が生徒と一緒に裏山に登らせて、焼け潰れた市
内を見て、「これは新型爆弾だから、町の方へ
は決して入らぬように」との指示があったとい
う。母は、郊外の自宅まで大きく迂回して徒歩
で時間をかけて帰宅した。この校長先生の指示
が、10年後に生まれた私の健やかな命につな
がったと感謝している。

多くの建物は焼け、沿道には多くの火傷をし
た人、川には水を求めて入る人が多かった。母
の水筒を見た、大やけどをした女性から「水を
分けて下さい」と懇願され、気の毒に思い一杯
上げたが、その人の具合が急変するのではと思
うと、怖くて一目散に駆け出してその場を去っ
たという。見るもの全てがまさに生き地獄とい

う怖い思い出だと印象深く話していた。

母は今90歳になり、被爆の日の事も筋道立てて話せない状況になっている。全国の被爆者全体の平均年齢も今年84歳を超えたとのこと、自らの被爆の実相を直接語れる方は限られてきている。そんな中で迎えた広島原爆の日の挨拶では、来春のG7サミットが広島市で開催されるので、各国首脳始め為政者にこの街で78年前に核兵器が使われた際の結末を直視するよう市長が強調していた。岸田首相も、世界に向けて被爆の実相への理解を促す努力を続けると述べていた。

核兵器の危険が、冷戦最盛期の水準まで高まっていると、国連のグテーレス事務総長が述べている今、唯一の被爆国として発信を強めることは、日本の国際社会での責務だと思う。

ウクライナ侵攻下の原発

核兵器の威嚇に加えて、一連の戦況の報道の中から、原子力発電所と核のリスクについて、改めて考えさせられている。これまで、原子力発電所の稼働中の巨大な事故は、たまたまウクライナと私たちの日本で発生したものであった。今回のウクライナ侵攻下で、大規模原発周辺への攻撃が起き、原発を盾にしているという指摘と、周辺攻撃したのは相手方だとの双方の主張など、いわゆる一触即発の核に絡む大事故が懸念されている。

松江

多くの書院生の郷里島根県は、県庁所在地に原子力発電所が存在する日本唯一の場所である。私は、危機管理ができていう条件でこれを毛嫌いせずに理性的に受け入れ、地元で誇りを感じる者の一人である。東京に暮らしていて無責任な地元自慢といわれるかもしれないが。

戦場近くにあるウクライナの原発については、東日本大震災における原発事故の悪夢の再現に決してならないよう、警鐘を鳴らし、平和圧力をかけていく努力が必要と感じている。

文明の岐路

起こりえないと言われるだろうが、来春までにウクライナがクリミア併合の2014年より前の状態に戻り、ロシアを含めたG8首脳が広島で原爆資料館を訪ねるという可能性は万に一つでもないものだろうか。

そんな平和回復は絵空事だとハナから諦めてはいけない。まずは、一大統領が核兵器のボタンを押してしまうかも知れないという現実を、未来永劫に絵空事にしてしまわなければならないのだから。トルーマン大統領が原爆投下を命じた後、核兵器保有国が9か国に増え、1万2千発を超える核弾頭が世界に存在する怖い時代である。

核兵器や原発事故で命を落とす人のない世界にするための様々な動きに敏感に心を寄せていきたい。

1978年の祈月書院から現在の世界を展望する

全国山村振興連盟 常務理事、祈月書院 諮問委員(松江北S50年卒)

実重 重実

1978年(昭和53年)の秋の研修会で、私は時間を頂いて「人間と地球生態系」というテーマで話をさせていただいた。大学4年になってから専攻である法律についてあまり勉強せず、私はもっぱら生態学について勉強していた。数十冊の本を読んだ上で取りまとめたのが、このテーマだった。「地球生態系に自分としても何かを貢献していきたい」という思いがあった。秋

の研修会の後、私はそれを原稿用紙300枚弱の文章にまとめておいたので、現在も内容が手元にある。

1978年と言うと44年前のことなので、もう数年で半世紀になるかというほどの時間が経った。しかし当時から生態学者をはじめとする科学者たちは、今日の地球の姿を予測して、様々な警鐘を発していたことが分かる。何よりも、

その頃から既に地球温暖化について危機が叫ばれていたことは、改めて認識しなければならない。デイヴ・キーリングがハワイのマウナロア山頂で二酸化炭素の長期的計測を始めたのは、1957年のことだ。そして1960年代には、米国科学アカデミーなどが温暖化についての学術報告を提出していた。

しかし一方で当時、気象学者の半数は、地球が寒冷化するとも主張していた。それは、氷河期の従来の周期性に加えて、人類による大気汚染も日照に影響するので、これから氷河期がやってきてもおかしくないという意見だった。地球は温暖化するという人たちと寒冷化するという人たちが半々だったわけだ。

それにもかかわらず、双方とも一致して指摘していたのは、気候の変動幅が大きくなるということだった。豪雨や河川の氾濫、旱魃・熱波・森林火災などが頻発する今日の状況は、予想されていたと言える。

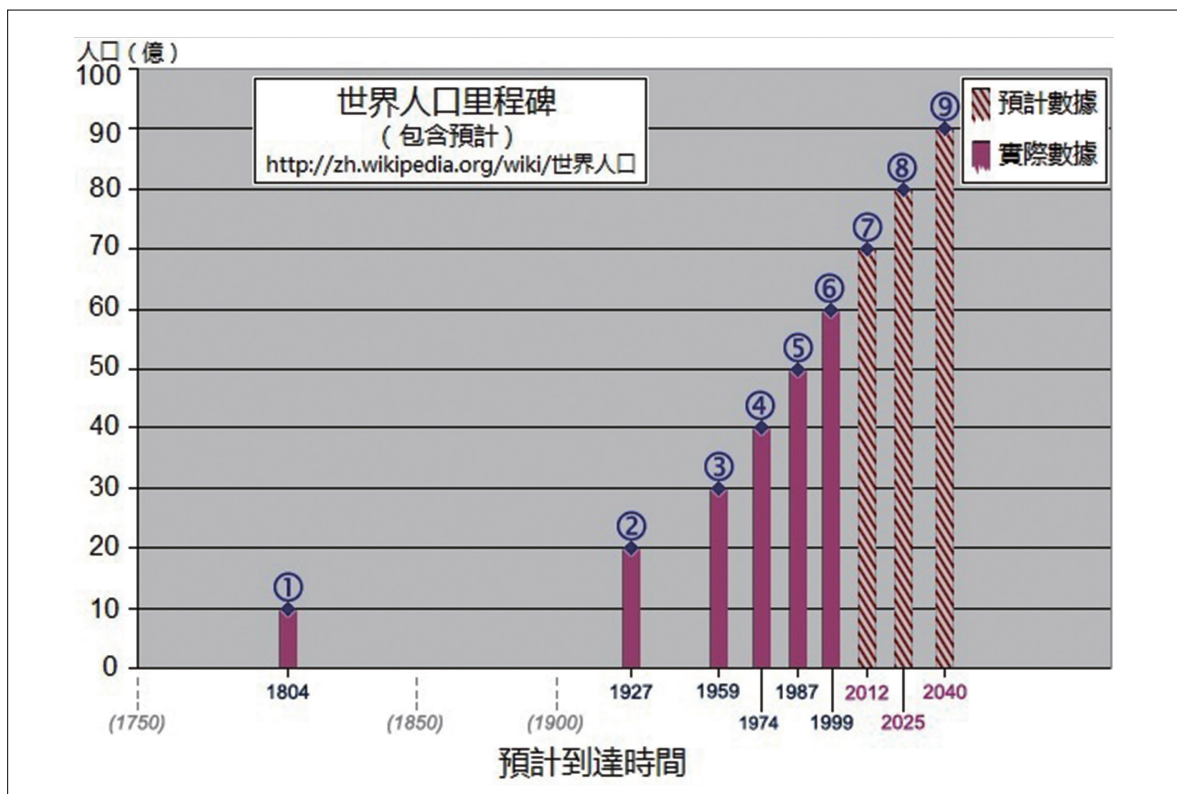
このほかに、廃棄物による大気や海洋の汚染、生態系の破壊や種の絶滅などは、当時から既に進行しつつあり、問題とされていたことだった。

何よりも今日改めて注目しなければならない

のは、その当時、既に人口爆発が最も深刻な問題であるとされていたことだ。1978年当時の世界人口は40億人強。それまでの50年間で約2倍となっていた。紀元前後の地球人口は3億人であり、それから17世紀までは徐々に増加し、産業革命が始まる18世紀後半から、ほぼ直角のような急カーブを描いて人口が激増していく。そして20世紀の初頭、20億人となり、それから1世紀経った現在、人口は80億人になろうとしている。100年という3~4世代の間に、4倍の増加である。我が国を含む先進諸国では少子化が問題とされているが、それはあくまでも産業や福祉といった社会の論理であって、生命や生物の論理ではない。

地球人口について、生態学者の目から見るとどうなるか。2012年、今から10年前に出た生態学の教科書「Principle of Life」(デイヴィッド・M・ヒリス他著)の中で、地球人口は過剰であり、意図的に人口減少を実現できなければ、という前提で、次のように述べられている。

「黙示録の馬に乗った騎士(戦争・飢饉・疫病など)が死亡率を増加させることによって、維持可能な人口サイズにまで減少させるだろ



世界人口の増加 (Wikimedia commons)

う」(アメリカ版大学生物学の教科書 第5巻 生態学・講談社2014年)

大変恐ろしい予言であり、最初にこの文章を見たとき、私は人道的な観点から批判を受けるのではないかとさえ思った。

しかし2022年現在の世界を見渡したときに、戦争・飢饉・疫病という数年前までには考えられなかった状況が出現し、不吉な予言がまさに当たってしまっているのではないだろうか。ほんのここ3年ほどの間に、世界は全く異なった景観となってしまった。

1978年当時の生態学の知見では、更に恐ろしいことが記録されている。

20世紀の半ば、ある科学者がネズミの過密状態を作って観察した。ネズミを囲いの中にいれ、餌を豊富に与えた。計算によれば5000匹まで増えるはずだったが、あるときから減少し、2年3か月後に成熟ネズミの数は150匹程度に落ち着いた。しかもそのネズミは精神異常と思われるものであった。集団の過密化によって、母親は巣を作らず、流産を起こした。オスは異常行動や共食いに走った。乳幼児死亡率は極端に高くなり、囲いの中の部屋によって住むネズミの構造が著しく変わった。ネズミの社会に大混乱が生じたのである。

また別の例として、1916年米国チェサピーク湾のジェームズ島3平方マイルの地域に、4~5頭のシカが移植された。シカは40年後には300頭まで増えたが、その2年後、たった3か月のうちに半数まで減少する事態が起こり、そして80頭まで減少した。40年がかりで増加したものが、わずか2年で崩壊したのである。

混み合いによって生物の個体数が減少し、一定値に落ち着く現象を「空間効果」と言う。これは細菌などの微生物でも見られることだ。混み合いによって死亡した哺乳類を解剖してみると、副腎皮質や脳下垂体が肥大しており、また心臓病のものも多い。シカの例では、副腎皮質は普通の個体より50%も重くなっており、若いシカでは80%も重かったのである。ストレスがいかに生理的な影響を及ぼしているかが分かる。また個体の行動についても、母性行動の欠如や注意の欠如によって幼児が死に、オスの攻撃性の増加によって他の個体が死ぬという点は共通

していた。

人間がネズミやシカと同じだとは思わない。しかし都市ではどこの国でも、既に過密というほどの状態となっている。そうした状態が、人類全体の精神状態に影響を及ぼしていないと断定できるものだろうか。

もちろん科学技術や医学、あるいはルールづくりによって、問題を乗り越えられる部分も多いだろう。しかし同時に、人間もまた一つの生物であるということも忘れてはならない。人口爆発にもなって、自然環境に対する圧迫が幾何級数的に増大し、現代社会の様々な混迷の要因と結びついていることを深く認識しておかなければならない。

私自身は、1978年の祈月書院における発表を起点として、地球生態系に貢献するというテーマをもって職業人生を送ってきたつもりだ。しかし、ついに食料危機というほどの重大な局面に直面したことはなかった。

未来を拓く諸君へ

それに対して、これからの時代を築いていく学生諸君にとっては、ちょうど今、激動の時代へと幕が切って落とされてしまったところだと言えよう。ウクライナ問題だけでなく、世界各地で摩擦・軋轢が高まり、紛争の予兆が散見される。気候変動と自然災害の激化、新型コロナウイルスなど感染症の蔓延、それに伴う経済停滞、原油をはじめとする諸物価の高騰など諸々の要因が絡み合い相互作用し合っているが、それらの根底にはホモ・サピエンスというたった1種の動物が異常発生しているという人口爆発があることを忘れないでほしい。次世代に生きる人たちは、そうした運命を生きるのだ。

祈月書院という場合は、これから社会と自分の将来を築いていかなければならない学生層、既に社会の各界で役割を担いながら活躍している社会人層、そして長い豊富な経験のある中高年OB・OG層といった全世代の交流が可能になる希有な場所である。若い世代の人たちは、こうした場を大いに活用して、羅針盤のない航海を平穩無事に続けて行ってほしいものだと私は願っている。

退職して考えること

東日本高速道路㈱ 代表取締役社長、祈月書院 諮問委員(松江北S54年卒)

由木 文彦

私は、昨夏退職するまで、38年余り役人として国の行政にかかわってきました。

特定の財やサービスについては、すべての人が必要に応じて利用できる機会の平等を保障することが強く求められる一方で、市場に依存しているのは公正なアクセスを権利として確保できないものがあります。

一つには、人が不幸な時にどうしても必要になる医療や福祉であり、二つには、子供など本人の経済的責任や意思決定責任を問えない人に必要な保育や教育であり、三つには、私がかかわってきた分野として、特に外部便益が大きい社会共通資本です。

これらを市場社会で確保するためには、財源をはじめ、どうしても政府としての役割が必要になります。

一方で、国土・国民を守る安全保障、すなわち外交・防衛などは国家としての典型的な仕事とされています。

これまで国家経済の拡大を是とし豊かさを追求してきた結果、格差が拡大し、気候変動の激化をもたらしています。コロナなどの感染症対応をはじめ、原子力の取り扱い、遺伝子操作の問題など、地球規模、人類全体の問題として対処することが求められています。

ウクライナ侵攻と制裁の応酬など世界の分断が深まる在り様を目の当たりにするにつけ、ナショナリズムという体制を維持する「国家」としての政府の役割は本当になくしてはならないものなのか、そうした役割を縮小していくような世界は作れないものだろうか、という思いを拭い去ることができません。

これからの世界の在り方を変えていける力として、私が期待したいものが3つあります。

一つは歴史の力。新しい世界史観です。現在の歴史は、各主権国家を前提として、国家の(勝者としての)由来とよって立つ基盤を示し

て人々の国家への帰属意識を醸成し、自ら国家の利害を第一に考えるよう目的化されているように思えます。これに替えて、将来に向けて地球社会・地球市民という新たな帰属意識を与えてくれる、人間は地球上で共に生きているということがわかる新しい世界史観が作れないものでしょうか。統一した歴史観を樹立することは困難でも、お互いの隔たりを橋渡しするものとして、できる限り共通性や関連性の土俵を作りつつ、複数の歴史像を認め合うことから始められるのではないのでしょうか。

二つは言語の力、世界語としての英語です。日本でも、欧米などの知識・知見を理解し獲得するため英語を勉強し、その意味や価値の体系を取り込む努力を続けていますが、英語そのものは英語を母国語とする人たちの言語、という位置づけから変わっていないと思われます。これを他国語にある価値観からの視点も盛り込んで、世界語として英語を鍛造しなおすことができないのでしょうか。そのプロセスと成果は、分断ではなく結びつきを強める大きな力になると思います。

三つは科学技術の力です。今回のコロナでも痛感しましたが、社会における政治的な事象に科学技術が密接にかかわっています。原子力や地球環境など、空間も時間も広大な問題が出現しています。科学技術は国家を超え、時代を超え、文明を超えて人類の進歩を支えるものです。これからはますます、非専門家の介入は許さないという専門家の姿勢は通用しなくなるとともに、科学技術分野の専門家に、社会を担う当事者としての役割が求められます。科学者、技術者の方からは期待のし過ぎといわれるかもしれませんが、専門的な評価・分析と自らの価値判断とを明確に区分したうえで、不確実性をはらむ問題への積極的な関与を求めたいと思います。

先ごろ、国際連合「世界人口推計2022年版」が公表されました：

<https://www.un.org/development/desa/pd/>

sites/www.un.org.development.desa.pd/files/wpp2022_summary_of_results.pdf

- ①地球上の人口は、今年11月に80億人に達し、2050年には97億人となる。2086年に104億人でピークを迎える。
 - ②平均寿命が地球規模で伸び、出生率が低下の一途をたどる中で、高齢化が進展する。
 - ③特に65歳以上人口は、今年の10人に一人（9.7%）の7.7億人から、2050年には6人に一人（16.4%）の16億人に、2100年には4人に一人の25億人に達する。
- この二つの推計より、これから2050年までの

人口増17億人については、約半数が65歳以上（8.3億人で49%）であるのに対し、2051年からの今世紀後半には、65歳以上の増加（9億人）が全体の人口増（ピーク104億人として7億人）を上回ることがわかります。

生産年齢人口が増えている間は、労働力の投入量が増加し、貯蓄率も上昇するので、成長が望めます。世界の人口構造の転換点を迎えるまでの間に、人類全体としての在り方を皆で今一度考えるべきだと思います。

これから今世紀前半に第一線で活躍する祈月書院奨学生の皆さんの活躍を期待します。

動物から人への臓器移植の開始 科学の発展への期待

富山大学理学部 教授(松江南S58年卒)

森脇 喜紀

2022年1月の朝日新聞に「ブタの心臓を57歳男性に移植『今のところ順調』米で世界初の試み」との記事が掲載された^[1]。私は動物の臓器を用いて人の治療が行われたことに衝撃を受けた。その後、半年の間に関連する記事が複数新聞に掲載されたことにも世間の反響がみてとれる。自分にも起こりえるかもと理解しておきたくその背景を調べ、夏休みの自由研究的に記述してみた。専門外が記述したので、正しい情報については参考文献などにあたって頂きたい。

ブタ心臓移植の経過

冒頭の記事の内容は、米国メリーランド大学で、非虚血性心筋症で体外式膜型人工肺（ECMO）に依存しているが（人からの）臓器移植等の治療を受けられなかった患者にブタ心臓の移植手術が行われたというものだ。動物から人への臓器移植を異種移植といい、人から人への同種移植と区別される。手術前に異種移植手術の実験性、リスクと利益が不明であることの説明がなされ、米食品医薬局（FDA）からは、深刻な命の危険に直面しており、その医療製品が利用可能な唯一の方法である場合に適用される許可が出されたようだ。ドナーとなったブタは、計10個の遺伝子を改変されており、それら

は、急性の免疫拒絶を防ぎ、過度な成長を防ぐための4個の遺伝子と人の免疫がブタの臓器を受け入れるための6個の人の遺伝子とのことだ。

術後の経過は順調であったが、3月に患者は亡くなった^[2]。術後には患者はECMOを外すことができ、移植心臓は拒絶反応もなく機能していた。術後48日目には一人で椅子に座りスタッフに手を振ることもできていたが、49日目には心臓壁の急激な肥大や心臓の異常が起り始め、60日目に心臓の回復の見込みがないとして生命維持治療を停止した。組織検査では、心筋細胞の壊死、赤血球の血管外漏出などが見つかったが、微小血管に血栓がないことから典型的な拒絶反応とは一致していない。また、公衆衛生の観点からブタ由来ウイルスが追跡調査されている。遺伝子改変ブタの心臓を人へ移植した最初の症例であり、患者を7週間支え様々なデータが記録されたとしている。

この後6、7月にはニューヨーク大学でブタ心臓の脳死者への異種移植が2件実施されている^[3]。2人の脳死者はドナーとしてではなく、異種移植のレシピエントとして実験に参加した。使われたブタ心臓は1月の移植と同じ業者が作製したもので、3日間にわたり様々なデータが取得されたとのことだ。

異種移植の必要性

米国では、2021年のデータでは心臓移植リストへの新規登録が5008名に対して、3818名が手術を受け、その一方で死亡もしくは重症化により525名がリストから外されている^[4]。日本国内では心臓移植希望登録者数は921名（2022年6月）、件数は同1-7月で44件、1997年からの累計でも648件であり、臓器の提供が不足している^[5]。動物からの移植とはいえ終末期の心臓病患者にとって選択肢が広がることは光明だろう。

移植を過去に遡ると、20世紀初頭に血管吻合法が開発され、臓器を求めやすい異種移植が試みられたが、免疫反応により移植された臓器が排除されるため臓器の生着時間は短かった。1950年代に抗体産生の抑制剤が発見され免疫抑制剤の開発がはじまる。60年代にはステロイド剤が使用されはじめ、80年代シクロスポリンの開発で免疫抑制が数段高まった。1964年に行われた初のチンパンジーからの心臓の異種移植では数時間の生着であった。1984年には子ヒヒの心臓が新生児（Baby Fae）に異種移植され21日生存した。その後も強力な免疫抑制剤の開発、技術の向上があり同種移植の成功率は高まっている。強力な免疫抑制剤にはその副作用もあり、免疫抑制薬を生涯服薬し続ける必要がある等のデメリットもある。異種移植では、移植直後の超急性拒絶反応への対処として、上記のように複数の遺伝子を改変したドナーブタが使われ、これらは製品化されつつある^[6]。

何故ブタが？

臓器の大きさや、解剖学的（構造的）に近く、遺伝学的には離れており長い養豚の歴史から感染症のリスクが低く、食用ブタの生産のため多数利用可能であり、多産で短期間（4～8ヶ月）で成長し、維持コストが低いなどの理由があるようである^[7]。また食用に飼育されていることから動物愛護の観点での問題が少ないと考えられている。

人への異種移植の前に、遺伝子改変されたブタ心臓をヒヒに移植する実験が多数行われている。遺伝子改変技術は、1996年の体細胞クローンヒツジの誕生（クローン技術、核移植技術）に始まり、2012年にCRISPR-Cas9システムといわれる遺伝子編集技術が確立され複数箇所

の遺伝子改変ができるようになり、移植後のヒヒの生存期間が大幅に伸びた。2011年には57日、2018年195日、2022年9ヶ月であり、直近のものでは移植後心臓に肥大などが見られないものの安楽死により実験を終了した。これらの結果が今回の異種移植術に応用されている。

我が国の取り組み

日本でのドナー不足は米国他多くの国々より深刻であるが^[8]、移植に関する理解が進み、異種移植の実施に伴う公衆衛生上の感染症問題に関する指針が2016年に改訂されて、ブタ豚島を用いた異種移植が実施可能となったようである。

異種移植が、科学技術の新たな積み上げで進展し成功の可能性が高まっており、やや性急とも見える判断により人体実験が行われたことに戸惑いを覚えたが、複数の施設で実施されたことには、技術に厚みがあり信頼が深まっていると思える。移植して何日、何年生きることができれば成功なのかは分からないが、生きたいという患者の願いに対して、この分野が出しつつある希望の光となると思える。さらには、術後の免疫抑制に伴う副作用から解放される研究が今後も進むことを期待したい。

参考文献

- [1] 朝日新聞（digital）2022年1月11日 合田 禄
- [2] B. P. Griffith et al., *N. Engl. J. Med.*, 387, 35 (2022).
- [3] tctMD news, <https://www.tctmd.com/news/two-more-pig-human-cardiac-xenotransplants-help-answer-many-unknowns>.
- [4] Organ Procurement and Transplantation Network, <https://optn.transplant.hrsa.gov/data/>
- [5] 日本臓器移植ネットワーク <https://www.jotnw.or.jp/data/>.
- [6] 朝日新聞（digital）「臓器移植用のブタ、米ではもうビジネス競争？『異種移植は希望だ』」2022年7月21日 合田 禄
- [7] D.K.C. Cooper et al., *Int. J. Surg.*, 23, 205 (2015).
- [8] 臓器移植対策の現状について—厚生労働省 第58回臓器移植委員会参考資料1 2021.12.23

「多文化共生」雑感

独立行政法人国際協力機構(JICA)、お茶の水女子大学出向中(松江南S60年卒)

小田 亜紀子

このところ、技能実習制度の(問題の多い)実態や実習生の失踪事案、人口減少が進む日本が今後経済成長を続けるための外国人労働者の確保など、「外国人材」「共生社会」「多文化共生」といったキーワードでの発信、イベント、報道等をよく目にするな、と感じています。

私が30年余働いてきた職場(独立行政法人国際協力機構:JICA)でも、最近では、外国人労働者の労働・生活環境を改善する目的で「責任ある外国人労働者受入れプラットフォーム」(JP-MIRAI)を立ち上げたり、外国人材受入れに熱心に取り組む自治体と連携したり、研究報告を発表したり。

日本国憲法前文

日本人も、日本に住む外国人も、安心して生活し、活躍できる社会を日本で実現すること。そのこと自体は、日本が「国際社会において、名誉ある地位を占める」(日本国憲法前文より)ために必要なこと。また、日本に住む人々が、次の世代に安心して、たすきをつないでいくことができる「続いていく」国であるためにも大切なこと。そう思う自分がある一方で、「本当に可能なのか?日本は、日本人は、変わるのか?」と感じていることも確かです。

細かいことをお伝えすることはできないのですが、私は今、政治的混乱の中から日本に逃れてきた開発途上国の家族の、日本での居住・生活・限られた条件下での就労支援などに、「仕事」としてかかわっています。

その中で痛感することは、万事がそうですが、上層の人々が語る「建前」と現場の「実態」との乖離は、なかなか埋めがたいものがあるな、ということです(文末のグラフ参照)。

「建前」と「実態」

政府も、自治体も、教育機関も、「多文化共生」に「建前」では賛成し、課題や危機感を共有。一方、それぞれの現場で「多文化共生」に

かかわる人々の意識、体制はどうでしょう。

開発途上国から日本へ「当分日本で暮らす、働く、生活する」前提で来た人たち。彼らの、これから暮らす市区町村での住民登録、国民年金や国民健康保険をはじめとする様々な行政サービスのための登録と申請、各種手当を受け取るための銀行口座開設、アパート探しと契約、入居の時の電気ガス水道開通手続き、入居してからのゴミ出し…。自治体にもよるのですが、これら手続きについての英語説明の併記は申し訳程度。ほとんどの窓口では日本語での対応。英語を解さない外国の方となると、お手上げ状態です。「仕事」として、私や同僚がお役所や業者さんと連絡を取り、やりとりをしていかなければ、何事も立ちゆきません。

振り返って自分は?

そんななか、自分に問うてみます。これが自分の「仕事」でなかったら、自分はいち市民として、彼ら(外国人)に親切に、丁寧に接して、彼らの力になることができるだろうか。例えば、自分ごみ出しをするとき。ルールを明らかに逸脱したり、粗大ごみを届けもせず出したりしていたら。お役所で手続きの手順がわからず、まごまごしている外国の方がいたら。

開発途上国にかかわる仕事を30年余してきたのに、こんなに簡単なシミュレーションで「全然問題ない、お任せを!」と胸張ってこたえることができない自分に、恥じ入ったり、「こういった反応が多数派なのではなかろうか」と暗い気持ちになったり。複雑です。

真の「多文化共生」とは

自分が、自分の家族が、自分の家の近所の人々が、自分の住むまちのお役所が、学校が、「日本語をあまり解さない人たちが周りにいる生活」を「日常」として自然に受け入れること。そして、むしろそれを楽しんだり、かけがえのない経験、糧にしたりすること。人種、宗教、

慣習、同国人同士のつながりなどによって、日本のコミュニティとの溶け込み具合は違ってきて当然ですが、少なくとも「溶け込む」「溶け込まない」の選択肢があり、どちらの選択肢を選んでも、それによって差別されないこと。それが「多文化共生」が目指す姿なのかな、とつらつら思う今日この頃です。

【参考リンク】

「令和3年度在留外国人に対する基礎調査報告書」
(2022年8月公表)

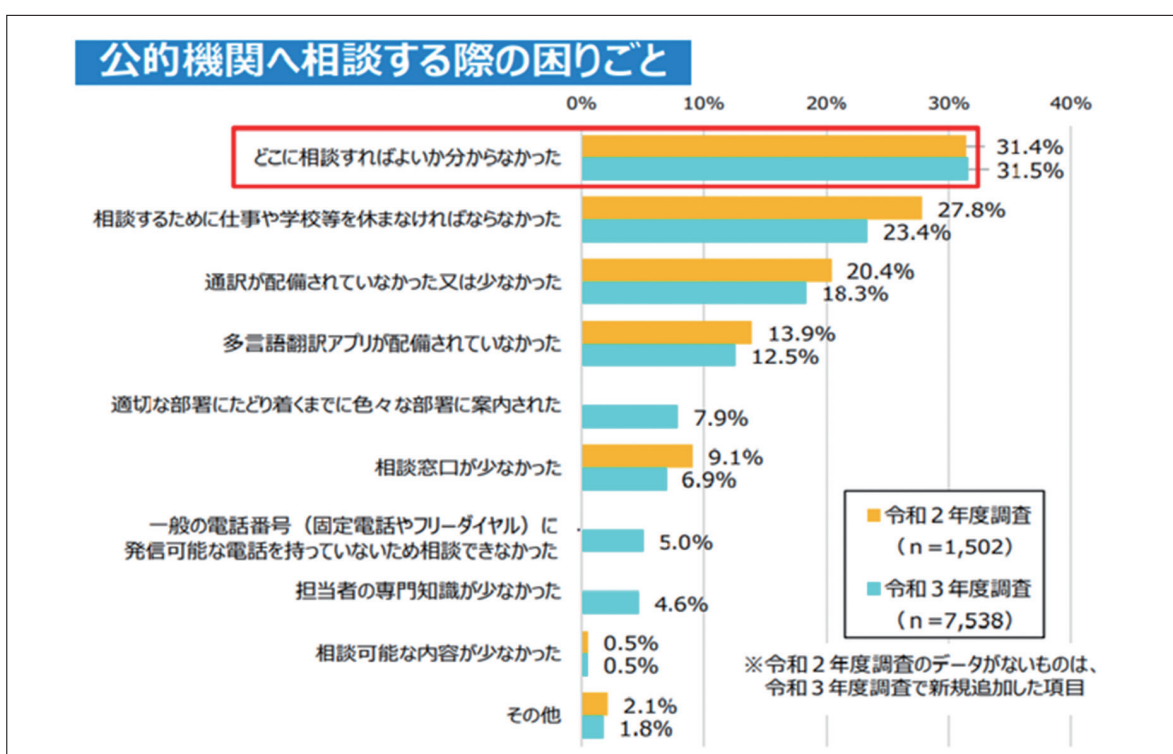
https://www.moj.go.jp/isa/policies/coexistence/04_00017.html

JICA緒方研究所出版物「2030/40年の外国人との共生社会の実現に向けた取り組み調査・研究報告書」

https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/publication/booksandreports/20220331_01.html

「責任ある外国人労働者受入れプラットフォーム」
(JP-MIRAI)

<https://jp-mirai.org/jp/about/>



出入国管理庁調査「令和3年度 在留外国人に対する基礎調査」主な結果の一部 (③ (情報入手・相談))
出典：出入国在留管理庁ホームページ
(https://www.moj.go.jp/isa/policies/coexistence/04_00017.html)

現代における宗教の在り方

(松江北S62年卒)

福間 浩

日本の元首相の暗殺を契機として、ある宗教団体がまるで反社会的勢力のように激しく批判され、政治の世界にも大きな影響を及ぼすほどになっている (執筆時点)。

わが国は戦後の連合国による占領政策で、日本の古来の宗教である神道の影響力を減らす方向に進んだ。これに前後して新宗教も台頭してきた。しかし中には強引な伝道で評判を落とし

たり、大きな刑事事件を起こしたりすることもあった。またわが国に限らないが、伝統宗教も、2~3千年前の教えがすべて現代社会に適合することは難しくなっている。これらによって少なくとも現代の日本では社会が表面的には宗教から遠ざかる方向で進んでいるように思われる。しかし、筆者は幼い頃より信仰を大切にす環境で育ったこともあり、宗教を重んじる立場である。また現代文明においても、その底には宗教や信仰が決して枯れることなく流れていると信じるものである。正月に神社に初詣したことがない人や、クリスマスを祝ったことがない人に会うのは難しいのではなからうか。

しかしそれでも宗教を重んじる立場から見ると、現代の日本人には宗教に関する事柄を判断するための知識が不足しているように感じられる。このため、宗教を批判するにしても、この世的な観点からの批判に終始してしまっているのではないだろうか。たとえば靈感商法に対する批判はあるが、そもそも本来、宗教で「商売」は本道ではない。イエスは神殿で「商売」をしていた人たちを追いつけている。したがって靈感商法を暗に「詐欺」として批判するよりも、むしろ「商売」を宗教の中心にしていることを批判すべきである。また献金の額に上限を決めるといった議論もあるが、宗教上の献金である「お布施」は政治献金とは違う。政治献金の場合は何等かの見返りを期待するものかもしれないが、お布施はそうではない。釈迦在世中、托鉢に出る弟子に対して「卑屈になるな」と諭している。「布施」をすることが「執着」を断つための貴い修行の1つと考えられていたからだ。さらには、布施の多寡によって信仰心が計られるわけでもない。これは「長者の万灯より貧者の一灯」のたとえで現代にも伝わっているが、どのような真心が込められているかが大切とされる。その意味で大富豪と一庶民ではお布施の額が違うのは当然であり、一律の上限を設けるという考え方はナンセンスである。

このように宗教側の立場から見ると、マスコミ等による宗教への批判は社会受けするものの、的を射ていないことも多いのではないかと思うこともある。こうしたこともあり、もっと多くの方々に宗教の本来の姿を知ってもらいたいと筆

者は願うものである。たとえば学校教育においても、特定の宗教に偏りすぎる必要はないものの、世界的な宗教（キリスト教、その母体のユダヤ教、イスラム教、仏教）や、日本の伝統的な各宗派についても、単なる外観や習俗だけではなく、その中の主な教えに踏み込んで学習するくらいのことが必要であると考え。ところで、筆者の属する仕事関係の私的な勉強会において、通常は金融について学ぶのだが、先日は番外編として仏教がテーマになった。仏教の中心的な教えをあえて英語（英単語）で学ぶというものであった。筆者はもちろん、他の参加者も興味津々という感じであった。学校以外でも、このように気軽な形式で、宗教が学ばれる場が広がることを望んでいる。

長くなったが、最後に、現代の宗教はどのような要素が含まれているべきか、筆者の考えを簡単にまとめて締めくくりとしたい。

1. 精神性を高めるものであること

これは人間として自らの心を磨き立派にするという意味である。宗教は知識を学ぶだけでなく、自分自身を善き方向に変革させるものでなくてはならない。

さらには、心を磨いた人が社会においても十分に活躍できるようなものでなければ本物ではない。

なお宗教の教えの中には、様々な徳目が含まれているべきであるが、現代および未来に向けては、高度な文明社会に適用できるように、成功哲学の要素も盛り込まれていることが望ましい。

2. スピリチュアルな要素を含んだものであること

これこそが宗教を道徳や哲学と分けるものである。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は天なる父またはその代理人が教祖や預言者に啓示を下すスタイルで始まった。仏教はやや特殊で、開祖自らが悟りを開いて始めたものであり、仏教は哲学と言われたり、無神論・唯物論と間違われたりすることもあるが、仏典にも悪魔との対話等、数多くの神秘的な話が後世に伝えられていることを見落としてはならない。そもそもスピリチュアルな要素がなければ、宗教による葬式などの法要は成り立たない。

教えにおいて、創世記を含む宇宙論や存在論が含まれるのも、スピリチュアルな要素あつてのものである。しかし教えとして凝り固まってしまうと時代遅れになり、現代の科学者が無宗教者、無神論者になるのも無理はない。このため宗教としてはとても難しいが、科学技術に対し開かれた立場をとるべきである。宗教と科学が連携することで新しい未来が拓かれる可能性もあるのではないか。

3. 社会変革を促すものであること

宗教は人類のより良い生き方を導くものである。1. で述べたような個人における精神的向上もあるが、宗教はそれを信じる者が増えると大きな集団になっていく。宗教としては宗教の中で抜苦与楽を行おうと努力はするが、時には社

会のあり方が変わらないと信者が抱える問題を解決できないこともある。たとえば宗教的に自殺をしないように戒めても、その自殺の動機が不景気による倒産であった場合には、その根本の原因である景気の回復を図るべきである。このようなことから、宗教はやがて社会変革の力になり、政治改革の力になるのは必然である。なお、政教分離という言葉は、本来は国家が特定の宗教を優遇したり差別したりすることを禁止するものであり、宗教の政治活動を抑止することを意図してはいない。

以上、簡単に現代の宗教の在るべき姿を述べた。様々な宗教を、外形ではなくその中身に踏み込んで判断、批評できる人が増えることを、心から願っている。

アカデミアに身を置いて

東北大学多元物質科学研究所 教授(松江北H3年卒)

火原 彰秀

大学に入学以来、理工学系学生・教員としてずっと大学で過ごし五十代を迎えました。学生の皆さんに講義をしたり、自分の専門の研究を進めたりする業務は大変楽しく、大学に職を得られたことに常に感謝しております。私の場合は、研究に没頭しているうちに自然にアカデミックの道を選ぶことになりましたので、自分のキャリアを見通して選択したいという若い方にとって参考になるかどうか非常に不安ですが、キャリアの節々で様々なことに対してどのように考えていたか、思い出してご紹介したいと思います。

大学は教育と研究の場

正直に言うと大学院進学後（特に博士課程に進学した三十台半ばぐらいまでは）、学部卒業・修士修了で産業界に就職した同期友人たちを眩しく感じるがありました。個人的な収入面もそうですが、社会の大きな流れに仕事をあわせて、強く社会と直接的に関わっているように見えたからです。私はその間、自分の研究テーマを探し、見つけ、解決するということを繰り返し、普遍

的な結果・理論を追い求める学者としての道を歩んでいましたし、いまでも基本的には同じことを繰り返しています。長期的な研究テーマは、時代によっては人気だったり不人気だったりします。時代のことはもちろん斜めに見ますが、基本的に普遍性の追求とその教育を本務とする大学で教員を務められるのは、私のような鈍臭い人間には幸せだったのだと感じています。

任期制

私は理工系の中でも、「この組織のこの装置を動かす後継者が必ず必要」というような分野ではなく、比較的流動的な（基本的に自分の研究室内で完結し、それを持って異動できる）分野にいます。私が大学教員になるころ、任期制が導入されました。私の助手、講師のころの任期は「3年、その後1年ごとの更新、最長5年程度」というものでした。当時任期制導入には組織によりムラがあったので、他大学の先生から大変驚かれたこともあります。私個人としては、「任期を意識しすぎず、キャリアの実績とな

ることをしっかりやる」という意識でいました。任期があることは、上司の先生と別の道を歩む切っ掛けにもなりますので、マイナス面ばかりでないと考えています。(もちろん、前述の「装置」の例など、ミッションによっては身分の安定が相応しい場合があることは否定しません。)任期制に対して批判的な論説をよく見かけますが、「学者の世界はそういうもの」に含まれる事象だと個人の経験からは考えています。

公募という制度

任期制とセットのようなことですが、大学教員のポストは「一枠のみの公募」という形を取ることが多くなっています。私もそのようなポストに応募して、数度異動をしてきました。一つのポストに数十人が応募することも珍しくありませんので、1名を除き不採択ということになります。私も不採択を経験しました。不採択の理由は、求められる分野との不一致や、求められる人材像(性格)との不一致など「自分のコントロール下でない(いまさら変えられない)理由である場合が多い」のだと考えて気に病まないことにしています。一方で、勝つ人がいれば負ける人がいるのは世の常ですので、自分の業績や年齢を睨みながら、次の就職活動の範囲を大幅に広げることは常に頭の片隅にありました。

大学は社会の公器

私たち大学教員の多くはネット上(researchmapなど)に、学歴・職歴といった外形的キャリアを公開しています。任期制などについても基本オープンにしています。一方で社会の大多数を占める産業界の方や、官公庁の方はこのような情報が公開されることは少ないかと思います。日本社会全体が縮小傾向という大きな流れの中にあって、走りながら上手くやっていかなければならない状況ですので、他の業界でも似たような制度的あるいは年代的なフラストレーションはあるのだと予想しています。

振り返って

アカデミックの道が失敗のない明るいキャリアだ、という気はありません。他の業界に比べて失敗しやすいかどうかはわかりませんが、適性・意欲のある方にとっては一つの王道といえると考えています。特に若い時期、一部メディアや大学同期のSNSなどでは、攻撃されやすい特性をもつキャリアです。功利的な考え方や、短期的な損得の面からの指摘は、「そうだよ」と当事者でも思うことはありますが、大学教員というキャリアの魅力はそこにはありません。大学教員は、データや理論、時に俗説に、虚心坦懐に向き合いながら、普遍的な真理を追求できる素晴らしい仕事だと考えています。祈月書院の中からも、より多くの「学問探究の徒」が育つことを期待しています。

「近所のフツのおばさん」

—冒険遊び場あじっこパークでの実践の日々—

冒険遊び場あじっこパーク 代表(松江東H11年卒)

梶谷 早知(旧姓小谷)

1. 「冒険遊び場あじっこパーク」

滋賀県米原市で「冒険遊び場あじっこパーク」を運営しています。「冒険遊び場」は「プレーパーク」とも呼ばれるデンマーク発祥の活動で、日本では1970年代に広まり、子どもたちの「居場所」が注目されるようになった近年、さらに各地に増えてきています。「Better a broken

bone than a broken spirit(心が折れるより、骨が折れる方がましだ)」「ケガと弁当は自分持ち」などの合言葉の下、子どもたちが自分の自由な意思で遊べる居場所となることを目指しています。いかにも「冒険」らしい、木登り、火おこし、ロープ遊具、穴掘り、木工などの遊びもできますが、ひたすらマンガを読んだり、寝

たり、ポーっとしたり、おしゃべりしたりして過ごすのも自由で、ゲーム機の持ち込みもOKです。雨の日も雪の日も外で過ごします。



小学生が建てたやぐらに上る幼児

私は、長男が生まれた15年ほど前にこの活動を知り、いつか自分でも開設したいと各地の遊び場を訪ねて回り、5年前、移住を機に任意団体を立ち上げて今に至っています。あじこパークは月に1度の土日に、空き地（休耕地）と農業用倉庫を拠点に行っています。また、日曜日のお昼は「子ども食堂」として、羽釜でご飯を炊き、汁物を作って居合わせた子ども、大人と一緒に食べています。

どんな家庭の子でも参加できるように、すべての活動が無料で、参加申し込みも不要です。子どもの参加人数は毎月数人から20人ほどです。

2. 子どもたちとの「斜めの関係」

最近では、子ども食堂が各地に増えています。中には「支援してあげよう」という大人の思惑が強く反映されて、学習支援の名の下で、食堂に来た子は必ず宿題をしなければならなかったり、大人が用意した「〇〇体験」などのプログラムへの参加が求められたりして、その他の過ごし方をしていると「ちゃんとしなさい」と注意されてしまう例も散見されます。これでは、子どもにとって学校や家庭と大差ない環境となってしまう、ホッとできる「第三の居場所」からは遠のいてしまう懸念があります。

私は冒険遊び場では「近所のおばさん」（愛称で「さあちゃん」と呼んでもらっています）として子どもたちに接しています。学校や学童

の先生でも、習い事やスポーツ少年団の指導者でも、ソーシャルワーカーでも、学校支援員でもない、ただの近所のフツーのおばさんです。役割としては、大ケガのないように見守ること、たまに一緒に遊ぶこと、話し相手になることなどで、遊びのプログラムは用意しません。私が場を仕切るのではなく、むしろ子どもの過ごし方の邪魔にならないように、子どもの空間に居させてもらっている、という意識を持つようにしています。

子どもの成長にとっては、上下関係（親子、指導者と教え子）とも、横の関係（子ども同士）とも違う、いわば斜めの関係（年齢的には上下関係だが、コミュニケーション上では対等）の存在も必要ではないかと思うのです。

3. 豊かな「3つの間」を子どもたちに

「最近の子どもはゲームばかりして外で遊ばない」とよく言われますが、彼らは、以下の「3つの間」が乏しい状況に置かれているといえます。

①「時間」:

放課後や週末も宿題や習い事で忙しく、自由時間が少ない。多くの時間は「将来に役立つこと」を身に付けるために使われ、「今、この瞬間に没頭したいこと」をやる時間は限られる。

②「仲間」:

少子化で、子どもの人数自体が少ない上に、近所の友達はいない習い事等をしていて不在がちで、地元で一緒に遊べない。

③「空間」:

交通事情や騒音への苦情などで遊べる場所や内容が制限されるというハード面、家庭でも学校でも地域でも常に大人の見守り（もしくは監視）があるというソフト面において、自由な空間が限られている。

こうした制約の中で過ごす子どもたちが、この「3つの間」を満たしてくれる遊び、すなわち①隙間時間で、②ネット友達と、③オンライン空間で遊べるゲーム機と共に過ごしているのは、無理ありません。しかし、これでいいのだろうか。この状況を作り出しているのは大人であり、子どもたちが自分の人生を生き抜く力を自

ら養うには、豊かな「3つの間」を子どもたちに返すことが必要ではないか。そう考えて活動しているのが我々、冒険遊び場に関わる人たちです。

冒険遊び場の基本は、「ルールがないのがルール」です。その子自身や周りの人を深く傷つけたり（大ケガ、いじめなど）、近隣に重大な被害が及んだり（火事など）する可能性がある場合を除いては、禁止事項は極力なくしています。

「自由に遊べる」ということは、「それに伴う結果を引き受ける責任が付いてくる」ということです。こう書くと、「あなたが招いた結果なのだから自業自得」「周りは助けてあげないよ」という冷たい自己責任論や、「自分の責任でやっているのだから、何をやろうと私の勝手にしょ」という自分勝手な姿を想像されるかもしれませんが、違うのです。「やりたいと思ってやった自由な遊びの結果を、自分自身が納得して受け入れられる」「困ったときは、仲間を助けてもらえる」と信じられるのが、私たちの目指す在り方です。

大人が示す「正解」を気にせず遊べば、当然、失敗もたくさんします。でもその試行錯誤こそ遊びの醍醐味で、苦勞の末に成功した時の喜びもひとしおです。

「自由と責任」についてのこのような考えから、加入しているのは賠償責任保険のみで、運営側の過失によらないケガの治療費等は参加者の自己負担です。

4. 「評価」からの解放—安易に褒めない

あじっこパークで心がけていることがあります。それは、子どもを安易に褒めない、「よくできたね」「えらいね」「上手だね」などの「評価」を含む言葉はなるべく避ける、ということです。一方、子どもの目線に近づいての「共感」の言葉は、率直に伝えます。「気持ちよさそうだね」「目がキラキラしてるよ♪」。場合によっては「へえ、そんな大きなもの、よく作ったね」などと驚きを伝えることもあります。

これには理由があります。学校、家庭、習い事など、子どもたちは日々の生活の中で「○○ができるか」「○○への意欲があるか」等の観

点で、大人からの評価を受ける場面が多々あります。勉強に関してだけでなく、「挨拶しているか」「忘れ物がないか」など、細かな振舞いまでが評価の対象となり、「(大人にとって都合の) いい子」であることが求められています。

「怒られたくないから宿題をやる」「褒められたいから漢字ノートをびっしり埋める（でも勉強はキライで好きな科目もない）」という子がいます。そんな子は、あじっこパークが終わる日曜日の夕方、「明日はまた学校かー。ストレスでしかないわ」と言いながら帰っていきます。

彼らの言葉を聞いていると、「褒められても褒められなくても、君は君だよ」「できないこともある、失敗することもある、やる気の出ないときもある、そんな君は人間らしくてステキだよ」と伝えたくくなります。いや、言葉で伝えたりしなくても、「3つの間」が満たされた遊び場で過ごしている子どもたちは、仲間や環境から、そのメッセージを自ら掴み取っているようにも見えます。

こう考えると、「遊び場にいることを許される大人」とは、子どもたちの行動や考えを評価するのではなく、その存在そのものを認め、彼らの自然な喜怒哀楽に共感することのできる大人ではないだろうかという気がしてきます。そして、そんな大人には、子どもを評価する必要のない立場の、「斜めの関係」の近所のおばさん、おじさんが適しているのかもしれませんが。

ちなみに「あじっこ」というのは、「子どもたちが、大人の評価など気にせず、自分自身の持ち味を発揮できる場に」と願って付けた愛称です。

5. ただの原っぱで

あじっこパークは、元々田畑だった土地です。栗や柿などの果樹、地域の方が建ててくださった小さなログハウスやピザ窯、小学生たちが建てたやぐらなどはありますが、子どもたちが一目見て喜びそうな、大掛かりな遊具などはありません。

そんな場所ですが、子どもたちは朝から夕方まで、何かしら遊びを創り出して過ごしています。

「あ〜、あじっこパークって楽しいなあ」

そう繰り返しながら歩き回っていた1年生の男の子は、朽ちた栗のイガをひたすら拾い集めるのに夢中になっていました。何時間も熱中して帰っていったときの満足そうな表情は忘れられません。

子どもたちの創造力とエネルギーにはいつも

圧倒されます。大人がヘンにお膳立てしてしまうと、この子たちらしいユニークな展開が見られなくなってしまふよなあと思いながら、近所のおばさんとしてその場に居させてもらっています。

花束贈呈で遭遇した悔しさと後悔

(松江南H18年卒)

錦織 亜希子

「それじゃあもう一枚、次は肩を組んでみましょう」

あれは2018年3月、私が30歳のときです。送別会のシーズンでした。その年は懇親も兼ねて、例年にないことでしたが、複数の課合同で開催されることになり、50名程度の集まりになりました。その年度に初めてサブリーダーという役割が付いた私は、他課との懇親も今後必要かもしれないと考えて、出席することにしました。定年退職により送別の対象となるのは2人で、うち1人が同じ課の方でした。私の所属する課で出欠を取りまとめていたのは課長補佐でしたが、その方が花束贈呈の役に私に依頼したときにまず、おかしいなと思いました。送別会に出席する職員のうち、退職される方とずっと近く長く仕事をしてきた方は別にいたからです。でも私はそのまま受けました。花束贈呈などの役回りが、同年代であっても男性職員ではなく女性職員に回ってくるのはよくあることで、小さなことだと、まだ考えていたからです。

送別会当日。会が進み、花束贈呈の時間となりました。もう一人いる、花束を渡す役の方もやはり20～30歳代の女性でした。その日の主役は退職される2人ですので、肅々と進めてさっさと席に戻ろうと思っていたのですが、流れで写真撮影が始まりました。まずは贈呈シーン、次は4人で。そして、退職される方と私の2人が並んで立った写真を撮られたところで、「それじゃあもう一枚、次は肩を組んでみましょう」の一声。何秒だったかわかりませんが、私は考えました。要求されていることに応えるために

は、私は何をしないといけないのか。まず、相手に私を触らせて、私も相手を触らないといけない。次に、体をもっと密着させないといけない。しかもこの人たちは気づいているのかしら、2人の腕を交差するにあたり、男性の腕の方が上になるのは当然だと考えていることに。つまり私は肩を抱かれることを要求されているわけ。この人たちにこにこして楽しそう。

この時の悔しさや怒りを時々思い出して整理しますが、結局彼らにとって私は酒席のコンパニオンで、同僚などではなかったのだと思います。この問題を考えるとき私が一番怖いのは、花束贈呈の役が回ってこなかった男性職員です。花束をもらった人も、写真を撮った人も、私を花束贈呈に選んだ人も、私より先に定年を迎えて去っていきますが、彼はこれまでの手本を覚えていて、これからそれらをするようになります。“小さなこと”は日頃から積み重なって、これでいいんだという勘違いと、こんなものだという疲弊が日々育っていつている気がします。ハラスメントの作法は脈々と受け継がれており、私たちの世代がまた次の世代に引き継いでしまうことを想像して、悔しく恐ろしく思います。

さて、肩を組むよう言われた私はどうしたかということ、ここは異文化圏なんだと自分に言い聞かせて、互いに触ることと体を密着させることは我慢して、結果的に肩を組みました。しかし私が一つだけ、我慢できなかったことは、ひざを曲げることです。写真を撮られる二人には身長差があり、私の方が高かったので、要望通り肩を抱かせてあげるには私が腰を低くする必

要がありました。しかしそれだけは絶対に承服できなかった私は、怒りに任せて腕を回し、相手の肩を抱くように手を添えたのです。そしてカメラに向かって早く撮れと目で促し、写真撮影を終わらせて、席に戻って散会まで黙々と時間を潰しました。送別会の写真は出席者に共有されたはずですが、あの写真はどうなったかわかりません。

あの日のことを思い返すたびに、悔しさと同時に後悔が胸に拡がります。あんなこと、すべきじゃなかった。仕返しなんて、フェアじゃないことをしました。その日の主役の一人に、周りに人がいて逃げられない場所で、「本来なら逆だけど背の高さが……」と目を白黒させて恥をかかせてしまいました。あんなことすべきじゃなかった。でもどうしたらよかったのか。もう4年もここをぐるぐるしています。

今回、祈月書院報への寄稿募集をいただいて、このテーマしか思いつかず悩んだのですが、「頭に去来することなんでも結構です」という

安部理事長の言葉に甘えて提出することになりました。ここまでお読みになって、「何をそんな小さなことを」とお感じの方もきっといらっしやると思います。しかしこの出来事において、花束贈呈に付属しがちなハラスメントを小さなことだと誤認してしまったことが、一つ目の失敗だったと私は考えています。この誤認によって不用意に第二のハラスメントに遭遇してしまい、動揺したまま感情的に第三のハラスメントを犯す側になってしまいました。

あれから私は花束贈呈を警戒するようになりました。“小さなこと”は小さなことではないと分かったからです。きっとこのような“小さなこと”は日常にたくさん潜んでいるでしょう。こんなものだと私も疲弊しつつあるので、こうして寄稿することで社会が変わるとまでは期待していません。ただ、次の世代の方々に届いて、迂回するなり立ち向かうなりそれぞれ事前に準備して選ぶことができる、その一助になればと願っています。

新型コロナウイルス感染症第7波にあたって

島根県立中央病院 血液腫瘍科 医員(松江南H18年卒)

林 克起

私は2020年から島根大学医学部附属病院血液内科で勤務していましたが、本年4月からは島根県立中央病院血液腫瘍内科で勤務しています。前職では直接的にはほとんど新型コロナウイルス感染症（coronavirus disease 2019、COVID-19）の診療にあたることはありませんでした。県立中央病院では救急外来当直もあり、わずかではありますが、COVID-19診療にも関わっています。県立中央病院の状況を中心に、島根県の医療、COVID-19の状況を簡単に報告いたします。

コロナ禍中の病院

島根県の医療従事者にとって今夏の第7波がそれまでと大きく異なるのは、島根でも大きな感染拡大が起こっていることです。6月末から全国に先駆けて島根で感染が拡大しました。当

初は出雲市内の事業所での大規模クラスターでしたが、瞬く間に島根、島根全域へと感染が広がりました。7月上旬には県下で1日当たり1000人以上というこれまでにない感染者数となり、その後も高水準が続いています。

島根でも全国でも、6月に優勢であったウイルス株は第6波と同様にオミクロンのBA.2株が主でした。6月上旬に島根でBA.5株の国内2例目が確認され、7月上旬には島根県のCOVID-19患者から検出されるウイルスのほとんどがBA.5株に置き換わっていたことが明らかにされています（保健環境科学研究所）。BA.5株は免疫逃避のためワクチンが効きにくく感染性が強いとされています。なぜ島根で全国に先駆けてBA.5株による感染拡大が起こったかは定かではないようです。免疫逃避等のBA.5の特性に加え、島根県ではこれまで感染

者数が少なかったため抗体保有率が低かったこと、対策が不徹底であったことなどがあるのかもしれませんが。

第7波では、医療機関でのクラスターも頻発しています。職員を起点とするクラスターの他、別疾患で入院した患者が入院後にCOVID-19と判明し起点となる例も多くなっています。このようなクラスターにより、一つの病棟が閉鎖（新規入棟・退棟停止）されるという事例が頻発しています。また、スタッフが接触者として出勤停止となったため人員不足となり、病棟の機能不全を起こしたり、手術停止となったりする事例も相次いでいます。他院では、病院全体で入院の受け入れ停止や救急外来受け入れ停止となる施設もでています。これらは、都市部では以前からあったことだと思いますが、島根では第6波までにはあまりなかったことです。島根県内では重症患者は5人未満と多くはなく、病床使用率は40%未満で推移しています。これらよりも、上記のような医療機関自身の機能低下の方が、診療への影響が大きい印象です。このように、第7波は島根県の医療にこれまでも増して大きな影響を及ぼしています。

コロナがもたらす不条理—尊厳なき死

話は変わりますが、コロナ禍で私が重要性を再認識した問題が、最期をどこで迎えるかということです。日本人の死亡場所は1951年に

は自宅が82.5%、病院は11.7%でした。その後病院死が増加し、2005年には82.4%となりました。在宅診療推進により病院死の割合は減少し、2019年には71.3%となっています（厚生労働省「人口動態調査」）。COVID-19の感染拡大以降、多くの病院で入院患者への面会、付き添いは制限されています。このため、病院で最期を迎えるということは、終末期を家族と離れて過ごすということを意味します。しかし、退院困難とわかっていながら入院せざるを得ないケース、短期間の予定で入院したにもかかわらず状態悪化により一度も退院できないままとなるケースも珍しくありません。家族と過ごしたいと希望される方は多く、パンデミック以前にも増して、在宅診療のニーズ、重要性が高まっているように思います。病状や家庭環境が許せば在宅診療に移行するよう調整するのですが、しばしば難渋します。調整が間に合わず、患者、家族に良い時間を過ごしていただけなかったのではないかと自責の念にかられることもあります。私自身はこれまで病院での医療に目を向けすぎていたのではないかと反省しています。

先日奈良医大のグループから、COVID-19の死亡率は季節性インフルエンザより高いという報告がありました。COVID-19のインフルエンザ化には未だ時間がかかりそうですが、パンデミックを契機に気付いたことを、今後に生かしたいと思います。

「規範」の使い方について

出雲市役所(松江北H18年卒)

高橋 達充

1. はじめに

皆様、大変ご無沙汰しております。あるいは、学校を卒業してからは研修会にも全然顔を出せておりませんので、はじめましての方がたくさんいらっしゃるかもしれません。出雲市役所に勤めております、高橋と申します。安部先生からいただいたメールにほいほいと誘われて、一つ文章を寄稿させていただくことにいたしました。

テーマは、私が最近ぼつぼつと考えていた

「言葉の使い方」について。もっとも、紙幅の関係で、言葉全般について語り切るのは難しですので、特に「規範」に絞って文章を書こうと思います。

とはいうものの、そんなテーマについて語ろうというのに、私は哲学を勉強したことも言語学を勉強したこともありません。無学で冴えない一公務員です。したがって、ただのお目汚しになる可能性もある。けれど、素人の考えが期

せずして重要な問題に（当たらずとも）かすっていたり、時事的でない文章がかえってアクチュアリティを持つこともあるかもしれません。

さて、ここまでで十分な保険をかけさせていただきました。いよいよ本論へ入っていこうと思います。

2. 「規範」とはどのようなものか

言葉は、様々な機能を持っています。例えば、自分の目の前にある「現実」を記述し、分析を加えたり、他者に伝達するというのは、言葉の主たる機能の一つでしょう。ですが、言葉の機能はそれに限られない。言葉は、自分の目の前にあるわけではないもの、「規範」を表すこともできるのです。

この「規範」というものは、特徴的な性質を持っており、それは何かと申しますと、「現実」を自らに合致するように作り変えようとするのです。例えば、「武力を用いてはならない」や「公務員は公正中立でなければならない」という「規範」なら、「武力を用いない」状態であったり、「公務員が公正中立である」状態を目指すものだといえるでしょう。

3. 「規範」の使用について

ところで、言葉はコミュニケーションや思考の道具なわけですが、「規範」もその言葉によって表現されるものです。ですので、その限りで「規範」も道具であるということが出来ます。

では、どのように用いる道具かといえば（言葉一般と異なるところはないですが）、「規範」を通じて「現実」を認識し、あるいは、そうして得た情報を伝達するために用いるものだということになります。

そして、「規範」が道具であるならば、そこからどのような効用を得られるのかは使い手次第ということになりましょう。ですが、とりわけ「規範」という道具については、「用法・容量にご注意」といった注意書きが必要だと思うのです。

3. 1. 「規範」の使用上の注意点①－過少な場合

それはどういうことか。まず、「規範」が過少になれば、何がもたらされるのかと申しますと、ニヒリズムです。

「お前さんはそういうけど、現実はそのじゃない。現実を見なさい。」こんな発言があったとしましょう。これ自体はありふれた発言ですし、別にニヒリスティックな態度でもない。ところが、ニヒリズムが蔓延すると、この発言から「だから、現実に服従しなさい」、あるいは、「むき出しの力関係に従いなさい」という結論が導かれるようになるのです。

この結論は、ときに現実的で、冷静で、スマートに映ることがあります。それゆえ、広く受け入れられてしまうこともある。しかし、この結論、実は全く現実的ではありません。冷静でも、スマートでもありません。この結論のほうこそ現実を見ていないのです。

なぜなら、現実の世界には規範も存在するから。現実を変えようとする規範も現実の構成要素だからです。ニヒリズムは、「我こそは現実を直視しているのだ」というようにふるまっていますが、「規範」が存在するという現実を見ていないことになります。

このように「現実」の認識を歪ませるニヒリズムはよろしくない。したがって、ニヒリズムを招く「規範」の過少は食い止められなければなりません。

3. 2. 「規範」の使用上の注意点②－過剰な場合

他方で、「規範」が過剰になると何がもたらされるのか申しますと、イデアリズムです。「現実」という地面から遊離した「規範」が熱を帯び、人々を取り込んでいったときにどんなことが生じてきたか。いちいち例を挙げて説明するまでもないでしょう。

4. 「規範」を適切に使うには

そういうわけで、「規範」は用法・容量を守って適切に使わなければなりません。では、適切な使い方とはどのようなものなのでしょうか。そこにいたるには事前準備と後処理を含め、いくつか段階を踏む必要があると思います。

まず、「規範」から認識される対象である「現実」を吟味します。そのとき、無色透明に見える「現実」自体、言葉による記述という過程を経た時点で、無色透明ではありえないこと（詳述できませんが、いかなる言葉もある種のバイアスがかかっているからです）を重々承知

しておく必要があります。

次に、「規範」を吟味します。「規範」の導出される過程、その「規範」の社会に占める位置・比重、自分自身がその「規範」に対し主観的に納得できるかなど様々な面から検証しなければなりません。

そして、(常に「暫定的に」という留保をつけなければなりません)「現実」が確定でき、「規範」にも問題がないということであれば、「規範」から「現実」を眺め、「規範」から「現実」までの距離を測ります。これでひとまず「規範」を「使った」ことになるでしょう。

ただ、我々が目指すのは、適切に使うことです。後処理も重要です。暫定的にであれば、吟味して問題ないと判断した「規範」ならば、それへ向かって「現実」を近づけるように努力しなければならない。かといって、「規範」以外の「現実」を軽視して無理やり「規範」の側に「現実」を引き寄せようとしても、確なこ

とにはなりません。

そうすると、「現実」の側に立ち、そこで資材(資源・時勢)を集め、方角と距離を誤らないように注意しながら、「規範」へ向けて、それらを積み上げてゆくしかないのではないかと。そして、一步一步、地道に距離を縮めていくしかないのではないかと。私はそのように考えています。

以上、「規範」の適切な使用に至るまでの作業を、「現実」と「規範」の吟味、「規範」から「現実」までの距離の測定、「現実」から「規範」への接近と段階を踏んでみてきました。しかし、この作業が一回で完成することはないでしょう。とすれば、この一連の作業は不断に繰り返される必要があります。これは大変な努力を要しますが、使い方に習熟するために努力が必要なのはどんな道具でも変わりません。そして、「規範」をこのように扱おうとする態度こそ、リアリズムと呼べるものなのだと思います。

人口減少社会と「学び直し」

JFEスチール(株)(松江北H21年卒)

内田 誠治

祈月書院の秋の研修会は大学3年生の奨学生が幹事を任される。私の学年が10年前に幹事となった際は、人口問題について発表を行ったが、それ以来私は人口問題に興味を湧き、時々データを眺めたり新聞の関連記事を読んだりするようになった。そこで、今回は人口問題について書いてみたいと思う。

日本の現状

総務省の資料^[1]によると、2022年2月1日時点の日本の人口は、1億2519万4千人である。前年より79万6千人の減少、減少率は0.63%と過去最高の減少幅となっており、人口減少が加速していることが分かる。内訳を見ると前年に比べ15歳未満は1.77%減、15歳～64歳は0.92%減、65歳以上は0.44%増となっており、若年層の減少が顕著である。

新型コロナウイルスなど足下の課題も多いが、



2012年秋季研修会「人口問題」
(大学セミナーハウス)

将来を考えると人口減少にもっと力を入れて取り組むべきだと私は思う。人口減少が問題となる理由はいくつもあるが、国の経済に与える影響が大きいことがその一つである。人口減少下では、投入労働力が減少し、経済成長が停滞

する。さらに高齢化も併せて進むとなれば、労働生産性の低下や投資の減少も生じることになり、この傾向が続けば日本の経済力は失われてしまう。

さて、この重要な問題に関して、10年前の祈月書院研修会でどのような議論になったか書院報を見返してみた。当時の研修会では、世界で人口が増える一方で日本では人口が減少することを認識した上で、下記のような結論を得ている。

「国内雇用の創出を図る一方、無駄を省き、エネルギーの利用効率を高める努力により、国際レベルの経済力を保ちながらエネルギー消費を抑制した国づくりを目指すしかない。」

改めて考えても、目指すべき方向はこれ为好いように思う。ただ、具体策には踏み込めていないため、特に人口が減少する中で国際レベルの経済力を保つ戦略について改めて考えてみたい。

人口が減る中で経済力を維持する手段としては、一人あたりの労働生産性を増やすという手がある。日本の労働生産性は高いとは言えず、2020年の日本の一人あたり労働生産性は8万ドル弱と米国の1/2ほどしかなく、順位はOECD加盟38か国中23位となっている^[2]。逆に言えば、日本の労働生産性にはまだ伸び代があり、人口が減る中での経済成長も可能だということの意味している。

シンガポールのリスキリング戦略

労働生産性向上を目指す上で参考になると思われるのがシンガポールである。シンガポールは、2015年に約14万ドルであった一人あたり労働生産性を2020年には17万ドルまで向上させている^[3]。これは、人口減少に危機感を持ったシンガポール政府が、全国民のリスキリング（Reskilling=学び直し）を促進する「スキルズフューチャー運動」等を展開し、労働生産性の向上を図ってきたからである^[3]。リスキリングとは、新しい職業に就くために、あるいは、今の職業で必要とされるスキルの大幅な変化に適應するために、必要なスキルを獲得する／させることである。シンガポールでは、特に40～50代のミドル層のリスキリングを推進することで、生産性が低い分野から生産性が高い分野へと人材の配置転換を促し労働生産性を改善している。

日本型「学び直し」戦略の提案

シンガポールを参考に、日本においても、リスキリング&生産性の高い分野への配置転換による労働生産性向上を目指すことが、人口減少下でも経済力を維持する道ではないかと思う。リスキリングの重要性は、日本政府にも認識があり、特に高度なデジタルスキルを有する人材の育成を重点政策に位置付けている。企業でもリスキリングの取り組みは始まっており、私の勤めるJFEスチール(株)でも、製鉄所の操業データを高度に活用するスキルを持つ人材の育成に取り組んでいる。しかし、企業が公表するリスキリングの例は、一部の社員のリスキリングにとどまっているように見える。労働生産性の大幅改善は、最新のスキルが無く生産性の低い全ての社員を対象にリスキリングを行い、生産性の高い業務に配置転換することでこそ達成されるはずである。従って各企業は、どの業務の生産性が低いのか、最新のスキルを持たない人がどの程度いるのかを整理し、配置転換まで想定した上でリスキリングを推進すべきだと思う。こうすることで、労働生産性を大きく改善でき、人口減少下での経済力の維持につながるのではないだろうか。

「学び直し」は人生を豊かにする

一方、国や企業の視点だけでなく、個人の人生設計という意味でもリスキリングは今後ますます重要になると思われる。人々の寿命が延びる一方で、世の中の変化のスピードはますます速くなっている。この時代に、1つのスキルに固執していると取り残されかねない。時代に求められる新たなスキルを、リスキリングにより獲得していく必要が出てくるだろう。せっかく平均寿命が伸びているのだから、私もリスキリングにより複数のスキルを身につけることで自分の能力の向上を図り、視野を広げて人生をより豊かにしていきたいと思う。

以上が、最近私が思うことである。このように社会問題について若い時に考えるきっかけを与え、私を育ててくれた祈月書院という場はとても貴重であったと最近感じている。祈月書院及びその関係者の皆様には深く感謝したい。

- [1] 総務省統計局、「人口推計（令和4年（2022年）2月確定値、令和4年（2022年）7月概算値）」
- [2] 公益財団法人 日本生産性本部、「労働生産性の国際比較2021」

- [3] 「シンガポール、全国民リスクリング 人口より生産性優先」、日本経済新聞、2022年7月29日
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM2456D0U2A120C2000000/>
(2022年7月30日閲覧)

学士編入という選択肢

鳥取大学医学部3年(松江北H23年卒)

井後 雅博

実は去年の4月から、2回目の大学生をしています。医学部への学士編入という制度を利用しました。

「もう一回大学に通うなんて勉強が好きなんですね」、自己紹介をするとよく言われるセリフです。私も、自分自身が編入するまでは、周りで学士編入とか再受験をしている人を見たら同じような感想を抱いていました。それどころか、大学を4年かけて出たのにまた大学に入り直すなんて、それまでの時間やお金ももったいないくらいにまで思っていました。

そのように思っていた私が、今その立場に至った経緯を、時系列を追って振り返ってみようと思います。この文章がどなたかの参考になると嬉しいです。

大学入学まで@鳥根

私は子供の頃からずっとやりたいことや将来の夢がありませんでした。幼稚園や小学校で書かされる将来の夢も、周りに合わせてスポーツ選手とか書いてましたが、心の中ではモヤモヤしていました。こんな風になりたいなと思う目標も特になく、受け身で日々を過ごしていました。試験の点数を取ることだけは得意で、学校の成績はよかったです。しかし、勉強へのモチベーションは全くありませんでした。そんな私に対して高校からの進路指導は特になく、東大を目指す成績だから東大に行け、という感じでした。自分も特にやりたいことはないので、将来の選択肢を多く持てそうな東大に行こうという感覚で東大へ行きました。

大学生活@東京

「東京に行けばなんでもあって聞いているし、人口も多いから素敵な出会いがあって、自分がやりたいことが見つかるに違いない!」というようにワクワク感を持って上京しました。でも、そんなに単純じゃありませんでした。チャンスに出会うには、自分から外へ飛び出して行って、さまざまな活動に参加したり、新しいことを始めたりする必要があったのです。自分のように受け身で生きる人間は、島根で生活しようが東京で生活しようが、考えの幅の広がり方は変わらないのです。馬を水飲み場まで連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできないようなものですね。

大学生活もそんなフワフワした頭のまま過ごし、就活を経て社会人になりました。ご想像の通り、私の就活はとてもヘタクソでした。なまじ東大まで行ったせいで、「今までなんとかやってきたし、これからもなんとかなるだろう」という気持ちがありました。厳しい自己分析や企業研究も行わず、内定をいただいた会社に入ったという非常に恥ずかしい話です。

社会人生活

社会人の中には共感していただける方もいると思うのですが、働き始めてしばらくすると、自分の人生の先が見えてくるような感覚がします。自分の先輩はこんな感じで上司はこんな感じだから、自分も将来はこういうキャリアを経由して定年を迎えるんだろうな、みたいな。それまでフワフワと生きてきた私は、少しずつ

ですが、ようやく危機感を覚えるようになりました。「このままの人生で、自分は幸せなのか?？」

不安を抱え始めてから、“これから社会の変化のスピードはかつてなく速くなっていき、柔軟に自立して生きる力が求められるようになる、会社の看板ではなく自分の看板を持っていないと生きづらくなる”、といった言葉がよく目につくようになりました。自分は、何も持っていないことに焦りを感じました。一方で、会社の日常業務については退屈さが募るようになりました。

新たな挑戦

生きる意味に正解不正解といったものではなく、自分がこれだと決めたものを勝手に生きる意味と名づけているだけのものだと思っています。この考え方に立って、自分の生き方を見つめ直しました。まず、自分のバックグラウンドとして山陰があることは避けられません。生き物が好きで生命科学に興味があることから、大学では獣医学を専攻しました。

最近「動物由来感染症」という言葉を耳にすることが多くなりました。人への感染症については医学が、動物の感染症については獣医学が対応していますが、動物から人へ伝播する動物由来感染症が増えると、医学と獣医学の協力がますます重要になります。獣医学を学んだ後に、医学の道に進むことに違和感はありませんでした。

家族的な文脈では、父が医師で、兄弟は誰も医師になっておりません。社会的には、このところのコロナの蔓延で、医療資源の不均衡や、人と人とのつながりに注目が集まりました。また、人生100年時代と言われて久しく、私の年代が65歳くらいになる頃には定年はさらに延長されていることでしょう。これらの条件を顧みたら結果、新たな挑戦として医学を専攻し、医師として働くことが私の天命なのではないか、というふう考えるようになりました。自己責任から出発して「天命」にたどり着くのはやや奇妙に思われそうですが、これは偽らざる現在の心境です。

医師として地域医療に従事し、地域の安定に貢献することを目標として、学士編入の道を選

びました。これは、自分にはやりたいことがなく、生きる意味も見出せないという諦観を一度経験した上で、自分ができる範囲で他者貢献の道をとという前向きさを取り戻した結果です。

2度目の大学生活@鳥取

現在は鳥取大学で、一度目の大学生活よりも真面目に勉学に励んでいます。プラスアルファで自分のできることを生かしながら、地域医療に貢献をしようとして少しずつではありますが、活動しています。

最後に、自分の生き方選択が後進の皆様の参考になればと願いながら本稿を綴りました。この先も努力し続けなければならないというプレッシャーを感じつつ、筆を擱かせて頂きます。



秋夜懐顧

鹿島建設㈱(出雲H28年卒)

一ノ渡 真行

野猿峠を抜けると一群の建物あり
同郷の士で机を囲む
ポピュリズム覆う世に未来はありや
談論風発にして時を忘る

夜更けれども灯りは消えず
辺りに響くは虫の音と談笑の声ばかり
新しき時代を創る仲間たち
酒酌み交わして皆友となる

ポピュリズムの影 未だ色濃きこの世界
日本の西方に戦火あり
今や世界を二分せんとす
同郷の士よ 豈に立ち上がらざるを得んや



大学セミナーハウス（八王子）さくら館屋上からの遠望
(セミナーハウスのご好意による)



研修会風景（2019年秋）

背中を押してくれる言葉

慶應義塾大学大学院修士1年(松江北H29年卒)

金井 貴佳子

みなさんこんにちは、金井貴佳子と申します。私は、2017年の3月に松江北高等学校を卒業して、現在は、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科の修士1年です。政策・メディア研究科という名前だけ聞いても、何の研究をしているのか、あまり想像がつかないかもしれません。実際、様々な分野の研究室があるので、私もよくわかっていないというのが正直なところですが、

研究科の中には8つのプログラムがあり、私はその中の「認知・意味編成モデルと身体スキル」というプログラムに所属しています。脳科学、認知科学、応用言語学、異文化間コミュニ

ケーションなど多岐にわたる研究室がこのプログラムに存在していますが、このプログラムに共通することの一つは、「上手くなる」「熟達する」という軸で、ある対象を定量なり定性なり、それぞれの研究室が得意としている研究手法で研究していると言えるかと思います（あくまで私見です）。

パターン・ランゲージ

私の所属する研究室では、さまざまな領域でよい実践をしている方やその領域のコツを知っているであろう方にインタビューを行い、その

実践のコツや本質を体系化、言語化し「パターン・ランゲージ」という形式にまとめることで研究しています。

私自身の修士研究では、このパターン・ランゲージという手法を用いて、フィリピンの若者のエンパワーメントをしようと試みています。具体的には2つのことをやっています。一つ目は、これまで研究室が10年以上かけて500以上のコツを言語化してきたのですが、それらを用いてフィリピンの若者の就労支援のワークショップを実施して、パターン・ランゲージを用いて、これまでを振り返ったり、これから自分のキャリアを考える手立てになりうるのか、実践研究をしています。

フィリピンでのフィールドワーク

2022年の夏は1ヶ月間フィリピンで研究を行っていました。ワークショップの傍ら、フィリピンの中でも貧しい環境のなかから、困難を乗り越えて安定した職に就くことができた人にインタビューを行い、貧困を乗り越え、よりよい



ワークショップ風景



体験の聞き取り調査

生活ができるようになった人々からどのような実践や行動をしていたのかを聞き取り、パターン・ランゲージの形式でまとめるという研究も行っています。

琴線に触れた言葉

大学院生になり、学部生の時よりも「ちゃんと」研究のお作法に則って研究を進める必要があるのですが、たびたび、これで大丈夫かなあと不安になることがあります。社会科学的研究のため余計にそのような気分に陥りやすいのかも知れません。そのような時、やはり先達は偉大なもので、著書を読んだり、文献に触れるたびに鼓舞してもらっているような感覚を覚えることも少なくありません。その中でも、一つ、みなさんと共有したい言葉があります。

「最終的には一事への賭けなんです。その賭けと労苦の全操作を支えてくれるのは、わずかに信念でしょう。『わずかに』という表現しか見当たらない心細いことが私などの貧しい経験でも多いんです。できるはずという、自分が立てた仮説を心に深く信ずるより仕方がない。」(内田義彦、『読書と社会科学』, 岩波新書, 1985, p.45)

これは、内田義彦さんの『読書と社会科学』という本の一節です。何が未来の正解かわからないことは多々ある。その不安に飲み込まれず、支えてくれるものがあるとすれば、それはわずかに信念なのだ。研究に限らず、生きていくうえでも、自分の人生の正解は何かわからないし、自分の得手不得手もやってみないことにはわからないなかで、前に進もうとするエネルギーをくれる言葉です。コロナパンデミック、ウクライナ戦争など大きな出来事の中で、一寸先がどうなっているかなんてわからないけれど、未来は希望だらけだと信じる思考法を先達の言葉や生き方から学びたいと思っています。

おわりに

まだまだ私自身未熟者ではございますが、引き続き、祈月書院のみなさま方から、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

2021年度(令和3年)秋期研修会報告「社会の多様性」

兼折彰、磯田成力、福光莉子、矢田琴子、近江俊樹

はじめに

2021年度秋季研修会は、10月30日、31日にzoomを用いてオンラインで開催された。今回の研修会は「社会の多様性」をテーマとした。「多様性」という言葉は私たちの社会や生活に浸透してきており、コロナ禍でその重要さが再確認されている。しかし、真の意味で多様性が社会の中で認められているとは言えず、様々な問題が生じているのが現状である。そこで、多様性にまつわる様々な問題を整理し、社会にとって望ましい多様性のあり方とは何かを議論することを研修会の目的とした。コロナ禍の同調圧力、ジェンダー、人種、障害、共同体からみた多様性の5つのテーマについて幹事が発表し、続いて質疑・討論を行う形式で進行した。

「自粛警察と同調圧力」

兼折彰

コロナ禍の生活で話題となった「自粛警察」を皮切りに、日本に蔓延する同調圧力と思想の多様性について最初に論じた。はじめにコロナ禍における生活様式の変化と自粛警察について概観した。コロナ禍では、マスク着用、国民や企業への自粛要請など生活様式が変化した。その中で、自粛要請に従わない個人や店舗を攻撃する「自粛警察」と呼ばれる人々が出現した。彼らは営業を続ける店舗を誹謗中傷したり、県外から来た人の車に危害を加えたりした。感染拡大を防ぐ名目があるとは言え、彼らの私刑行為は法的根拠に基づいていない。したがって、これらの行動は人々の行動や意思決定の多様性を侵害していると考えた。

続いて、自粛警察が生まれる要因として同調圧力について論じた。同調圧力とは多数の意見に従うよう少数派に暗黙のうちに強制することであり、コロナ禍においても人々が同調圧力を気にする傾向があることが研究で明らかになっている。また、諸外国に比べて日本では同調圧力が特に強く、その要因のひとつとして「世

間」の存在があることを述べた。「世間」とは現在および将来、自分に関係がある人たちだけで形成される社会のことであり、日本ではこうした共同体の感情を毀損することを悪とする考えが非常に強く、さらに共同体感情を毀損する人々を排除する傾向にある。このような共同体感情の毀損を悪とする根拠として、ベンサム功利主義を説明した。効用の理論に基づけば、自粛しないことで個人が得られる幸福よりも、共同体が被る迷惑や不安の総和の方が遥かに大きいということである。以上の議論より、日本で同調圧力が強い要因として、日本人は自分の所属する「世間」の倫理観に従っており、そこから外れたものは共同体を毀損する存在として排除してもいいと考えることを論じた。

最後に、同調圧力の解決策として「思考のリテラシー」を持つことを挙げた。同調圧力に囚われる要因の一つとして、偏った視点からのみ物事を判断することが挙げられる。それを改善するには、物事に対して多様な視点・価値観から考える必要があると考えた。そのためには、複数のコミュニティに所属することで自己の属性を一つに規定しないことと自分の視点を磨き上げることが重要だと論じた。多角的な視点から物事の是非を自分で判断し続けることで、同調圧力に吞まれ不当な批判・攻撃をする世の中が改善していくのではないだろうか。

「性的マイノリティの問題」

磯田成力

次に、近年特に議論されることが多くなった性的マイノリティにまつわる問題について取り上げた。はじめに、性的マイノリティの定義について説明した。「性はグラデーション」という表現がよく知られているが、これは人間における性のあり方が単なる生物学的な性別では捉えきれないことを表している。性の要素には、「身体性」「性自認」「性的指向」「性表現」の4つがあり、それぞれ個人ごとに質的な違いを持

っている。そしてこれらの組み合わせで性的アイデンティティが形作られる。現状では、身体性と性自認が一致し（シスジェンダー）、異性を好きになる人（ヘテロセクシャル）がマジョリティと見なされており、これ以外の性的アイデンティティを持つ人々が性的マイノリティと呼ばれている。近年では、人口の8%を性的マイノリティが占めるという調査結果も出ており、社会的に無視すべきでないことは明らかである。

次に、性的マイノリティの当事者が直面する苦悩と、その苦悩をもたらす現在の社会の問題点について説明した。その中で、マジョリティの無知・無関心が性的マイノリティに対する誤解や差別的発言の原因であることを指摘した。これらの差別意識の背景として、宗教的観念によって異性愛だけが通常とみなされ、その結果として同性愛嫌悪や女性蔑視などの偏見が増長されたという歴史的経緯がある。つまり、特定の性的アイデンティティを恥じたり憎んだりする根拠は全く合理的ではなく、誤解や差別的発言は無自覚のうちに生じているといえる。したがって、社会における性的マイノリティへの差別意識を解消するためには、まず性に関する正しい理解を持つことが必要である。そして、自らの性について困難を抱えている人が身近にいることを自覚することで、差別的発言の抑止につながると考えられる。

一方で、性的マイノリティに対する問題を政策として解決するにあたり、細かく分類されている性的マイノリティそれぞれに適した対応をとることは困難であることも指摘した。研究分野においても、ゲイやレズビアンについて論じたものは多い一方で、その他の性的マイノリティについては知見が不足している。そこで、最小限の経済的努力で全体最適を取る方法として、これまでの男女二元論的な性別に対する価値観からの転換が求められる。そのためには、性を画一的に分類するのではなく、個々人が持つ性的アイデンティティを尊重する姿勢が重要だ。具体的には、婚姻を性に関わらず認めることや、トイレや浴場の第三の選択肢として個室を設けるなどの施策が考えられるであろう。このような政策の実現のためには、教育・広報による個々人の性に対する価値観の見直しや合意形成

も合わせて行う必要がある。

以上のような性的マイノリティに対するダイバーシティ社会への提言に対して、ダイバーシティを無秩序社会の形成と捉える批判も想定される。例えば、結婚という伝統の文化的崩壊やヘテロセクシャルによる制度の悪用といった理由による批判が挙げられる。確かに男女の区分を付けるべき場面は多々あるが、男女平等社会の必要性については既に世界的に認知されている。したがって性的マイノリティについても、ヘテロセクシャルであるマジョリティと同等に自らの性に誇りを持ち幸福を掴む権利は保障されるべきだ。マイノリティに対する権利の保障は人類の努力による相互理解によって確立されるものであり、惰性による無秩序とは一線を画していると考えられる。

本発表では、性的マイノリティという観点からこれからの社会のあり方について議論した。性という個性の違いを認め合う社会の実現のためには、マジョリティとマイノリティという分断された二つのカテゴリーを一つにし、個を尊重しながら共生を可能にする努力を個人から社会制度までの様々なレベルで行う必要がある。

「人種差別の問題について」

福光莉子

人種差別の歴史は古く、植民地支配の拡大や奴隷制の導入など、何世紀にもわたり社会の発展の下に黙認されてきた。その結果として生み出された白人と非白人という社会的分裂の構造は今なお根深く残っており、2020年には世界中でBlack Lives Matter運動が拡がりを見せた。私たちの多くは「差別をしてはいけない」という意識を持っているにも関わらず、なぜ人種差別がなくなるのだろうか。今回の発表では、アメリカ社会における黒人差別を例として取り上げ、「差別をしている側」の持つ特権に着目し、目指すべき社会のあり方について議論した。

まず、アメリカ社会における黒人差別について考えていく上で、なぜ「All Lives Matter（全ての命が大切）」ではなく、「Black Lives Matter（黒人の命も大切）」と掲げられているのかに着目した。アメリカ社会において、黒人男性の死因の上位に挙がるのが「警察からの暴

力」であり、非武装の黒人男性が警察官の暴力によって命を落とす可能性は、白人男性の2.5倍である。Black Lives Matter運動では、「全ての人の命が大切」という大前提のもと、「公正 (Equity)」の観点から黒人の救済を訴えているのである。ここで、「公正」とは個々の状況に応じた手助けをすることで全員が「同じ待遇」を得ることができるようにすることを意味している。この「公正」という概念は、個々人の置かれた状況を加味することなく同じ待遇を施すことである「平等 (Equality)」とは違うことに注意する必要がある。つまり日常的に生命の危機に晒されている黒人に対して、「平等」原則から黒人の救済に反対することは非人道的であるだけでなく、逆差別論に通じかねないことを我々は自覚する必要がある。

「公正」という概念から差別問題を考えるとき、「被差別集団がいかに不利益を被っているか」についての視点で語られることが多いが、「特権を持つ側がいかに優遇されているか」という視点からの議論は少ない。このように特権を持つ側が注目されない理由として、「特権を持つ側の無自覚さ」にある。本発表では、アメリカにおける白人-非白人の人種差別問題を取りあげ、白人が持つ特権に関するペギー・マッキントッシュの考察や「白人であることはあなたにとって何を意味するか」ということを白人にインタビューした心理学者の実験について紹介した。そして、白人が特権を持っていることに無自覚であることが、「公正」ではなく「平等」原理につながり、結果として特権を持たない非白人に対する抑圧的な行為や存在となってしまう可能性について言及した。これは白人-非白人に限らない人種差別の根本的な問題であり、日本人も自らが持つ特権を自覚して人種差別の問題に向き合わなければならない。

最後に、人種差別への向き合い方として、自らの持つ「特権」を自覚し、それを分け与えるためにできることは何かを考える態度が求められると結論付けた。余裕があり特権を持っているとされる人々の意識を変えていくことや、「公正」の観点から弱い立場に置かれた人々に対して手を差し伸べていくことが必要である。このような意識や態度を醸成するためには、教

育が重要な役割を果たす。多くの人々は、社会の慣習や受けてきた教育によって無自覚に「差別主義者」にされてきた。自身の持つ特権に自覚的になり、それを持たない人々が置かれている状況や、「公正」の実現を阻む問題に対して積極的に考えていくことのできるような教育が求められる。

また、発表後の議論においては、「公正」をいかに実現するかについて多くの意見をいただいた。その議論を通して、特権を持つ人々が持たない人々に対して何かを「分け与える」アプローチだけでなく、特権を活かして「仕組みから変えていく」というアプローチも考慮することが必要だという考えに至った。例えば、人々の目の前に高い塀がある状況を想定した時、ある人は上から壁の向こうを覗くことができるほど背が高く、ある人は何も見えないほど背が低いということが考えられる。背が低い人に対して踏み台を与えるということは、公正な手段だと言える。しかし、必ずしも上から覗くことを目指す必要はない。下の隙間から覗くことを認めることや、塀自体を作り替えるなどのアプローチも考えられる。このように、既存の形に捉われない発想や配慮によって「公正」を実現する視点が人種差別問題を解決する上で重要ではないだろうか。

「障害と多様性」

矢田琴子

日本における多様性に関する問題の中で、障害というテーマは比較的長く検討されている。「障害がある人となない人がともに生きる社会」という理念は社会一般に普及しているが、依然として様々な問題が存在する。本発表では、日本における障害者に関する社会的問題を論じ、障害を含む多様性を実現するために必要な今後の社会のあり方について議論した。

障害の原因がどこにあるのかという考え方には「医学モデル」と「社会モデル」というものがある。「医学モデル」とは障害を個人の問題だととらえ、個人の持っている条件や身体的な課題に対して医学的な治療やケアやリハビリが必要だとする考え方である。一方、「社会モデル」とは社会の中で自由に生きる条件が整って

いないことが「障害」であり、社会の方に問題があるという考え方である。本発表では後者の「社会モデル」に焦点を当てて、多様性と障害の問題について考えた。

平成29年度版『障害者白書』によると、身体障害児・者は392.2万人、知的障害児・者は74.1万人、精神障害児・者は392.4万人であり、国民の約6.7%が何らかの障害を有している。また、うつ病、適応障害の罹患者やADHDなど発達障害のグレーゾーンに存在する人が増えていることなども鑑みると、社会で生活を送るうえで何らかの障害を抱えている人の割合は年々増加しているといえる。

障害者の社会活動や人権の重要性が訴えられているものの、依然として様々な社会問題が存在している。その例として、旧優生保護法問題、障害者雇用問題、発達障害などの障害グレーゾーン問題が挙げられる。本発表では、近年発生した障害者にまつわる重大事件である津久井やまゆり園（相模原障害者殺傷）事件を取り上げた。

2016年7月26日深夜、知的障害者施設「津久井やまゆり園」（神奈川県相模原市）で、施設利用者への殺人及び殺人未遂事件が起き、合計46名の死傷者に及んだ。事件後自首した容疑者は「障害者はいない方がよい」という内容の発言をし、ネット上では犯人に対する賛同の意見が少なからず存在していた。犯人の思想や犯人に賛同するような意見が形成された社会的背景として「優生思想」や人物評価における「生産性」や「合理性」の要求があることを指摘した。

しかしながら、私はこれらの優生思想や生産性、合理性などの視点だけでは、障害の有無に関わらず、どの分野の多様性も達成することはできないと考える。なぜならば、上記の思想には「その人が現在の状況下にあるのは、本人の努力だけでは変えられない運や偶然の要素が限りなく大きい」ということが忘れられているからだ。このような偶然性に対する理解を深め、排除せず容認することが多様性のある社会にとって必要不可欠である。また、「社会モデル」から障害者に関する問題を解決することを考える場合、現状の障害者への支援制度には限界がある。そのため「合理的配慮」などの多様性を実現するためのさらなる制度やサポート体制は

必要だ。障害を含め、個人の努力などでは変えることのできない要素を人々が互いに許し認め、それをサポートする体制をソフト面、ハード面の両方から構築していくことが、多様性が真に実現された社会への第一歩になると考える。

「共同体からみる多様性」

近江俊樹

最後にこれまで扱った様々な視点での多様性を「共同体」という概念から統一的に解釈することを試み、これからの多様性の在り方について論じた。

まず、今回扱ったマジョリティとマイノリティの二層構造について論じた。シスジェンダーやヘテロセクシャルに対するLGBTQ+、白人に対する有色人種、健常者に対する障害者のように、マジョリティと差別や社会制度の点でハンディキャップのあるマイノリティという二層構造がある。この問題に対し、ジョン・ロールズが提唱した正義論の中の格差原理に当てはめて考えた。格差原理は社会で最も不遇な立場にある人びとの利益になるような社会的・経済的不平等しか認めないと定める。この不遇な立場にある人びとをマイノリティの人びとで置き換えることにより、ロールズの提唱する原理が多様性をもたらすと考えた。しかしながらこの政治哲学においては、原理原則を選ぶ際に自分が何者であるかの情報を全て隠し、平等で交渉力に差を無くす「無知のベール」と呼ばれる考え方を導入しなければならない。この考え方を実現するためには、すべての人に対して身体・認知機能が正常にはたらき、正しい自己分析と客観視を要求する必要がある。したがって、この「無知のベール」は個人の多様性を抑制してしまうという問題がある。

この問題を解決するために、政治哲学者であるマイケル・サンデルが提唱する「共同体」という考え方を説明した。共同体の構成員は、個人を形成する出自や属性といった社会的アイデンティティを通して社会に参加することが求められる。そのためには、避けられない不一致、すなわち多様性を受け入れる公共文化と多様性に対する相互的尊重を必要とする。したがって、共同体の原理に基づいて多様性の実現が可能に

なると考えられる。共同体内におけるマイノリティとマジョリティの両者が相互に理解するためには、各々が共同体の存在を認識し、かつ両者が同一の共同体へと帰属される必要がある。なぜならば、単純に生活を共にする場を共有していたとしても、共通した帰属先が存在しなければ共同体としての効用はないからである。共通した帰属先としての共同体が形成されたとき、その共同体の中の多様性は実現するのである。

さらに、この共同体の考え方が広まっていった未来について論じた。その未来では様々な共同体が形成されると考えられるが、最も大きな共同体は、人類皆が帰属する共同体である。そのような共同体としては、地球という人類が生きる惑星やヒトという人類の種が考えられる。これらの規模で共同体が形成されたとき、道徳的信念や他者を尊重する考え方が各々に備わることで、地球やヒトの未来について本格的に考えることができるようになり、真の多様性の実現が叶うのではないかと結論づけた。

最後に人びとが共同体を意識するために必要なことを論じた。人びとが共同体を意識するためには、社会の中の公共意識などの他者への意識と創造性や価値観、道徳心などの自己への意識の両方の考え方を養わなければならない。では、私たちが他者の存在と自己の認識を行えるようになるには何をすればよいのだろうか。私自身は結論として、学校教育による学力だけでなく情操を育む社会制度の必要性を挙げた。質疑応答やコメントの中でも情操教育の重要性が挙げられた。多様性の尊重が促進されるこの社会の中で、情操教育こそが求められる教育の私たちではないかと考えられる。

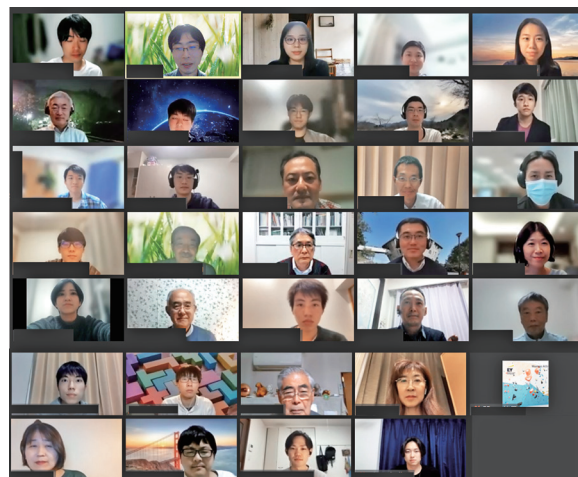
おわりに

「社会の多様性」というテーマの下、自粛警察と同調圧力、性的マイノリティ、人種差別、障害者差別の問題を取り上げ、多様性の尊重が叫ばれる社会に生きる私たちはどうあるべきかを考えた。昨今、急激に「多様性」という言葉が用いられるようになった背景には、グローバル化に伴い人や物、情報の移動が活発になったことで、実世界やインターネット上で多種多様な共同体が築かれ、人々の帰属する共同体が増

え続けていることがある。自分とは異なる他者、異なる共同体の存在を無視しては生活が成り立たないほど、様々な要素が複雑に絡み合った社会を私たちは生きていかなければならない。したがって、他者を虐げたり、異質なものを遠ざけたりするのではなく、対話を重ねながら互いに尊重し合い、理解を深めていく努力が必要だ。それぞれが異なる共同体に属しながらも、同時に1つの大きな共同体に帰属する「地球人」へと成長できたとき、真の意味で「多様性」の尊重された社会が実現されるのではないだろうか。皆で1つの共同体を作り上げていくためには、他者と自己の違いを認め、公正な社会を築いていくために必要なことを考え、積極的に学び、行動を起こしていくことが求められるのではないかと思う。

今回の研修会も昨年度と同様に、完全にオンライン形式での開催となった。幹事も直接顔を合わせることなく、研修会までオンラインでの話し合いを重ね、準備を行ってきた。初のオンライン開催となった昨年度の経験を活かし、今回は小グループごとのディスカッションの時間を複数回設けた。対面による開催時のように他の参加者と話をする機会や、意見を交換する機会を多く持たせたことで、よりテーマへの理解も深まり、議論も活発に行うことができたように思う。

最後に、事前の打ち合わせから当日の発表まで、様々なご支援、ご指摘をいただきました役員の方々、また当日の議論に参加してくださった皆様に心から感謝申し上げます。



編集後記

特集の趣旨は巻頭で触れた。この企画を実地に移すに当たって、先ず名簿にあるOB／OG関係者全員に寄稿の案内状を送付した。この時、参加希望が通常の冊子の許容数を大幅に超えた場合には別冊を用意するつもりであった。しかし寄稿の案内文が十分に練られていなかったこともあってか、実際に参加の意向を示されたのは3名に留まった。その後個別に案内を続け、7月末には年齢、職業に広がりのある寄稿予定者17名のリストができ上がった。8月に入ってさらに参加者が加わり、最終的に21名、一冊に収まる稿数になった。

祈月書院創設の先輩は2年前の玉木久光顧問の逝去をもってすべて鬼籍に入り、最早寄稿者に名を連ねることはない。創刊号から今日までの書院報を俯瞰して、今更ながらに先人の貢献（視野、人脈）が書院や書院報の骨格を維持する上で大きかったことに思いが至る。彼らの貢献が完全になくなった今、どこに書院報の標準を合わせて編集をして行ったらよいか、足立理事の表現を借りれば“喫緊の大課題”である。今回寄稿に応じて頂いた諸賢には心から謝意を表したい。

祈月書院の現行奨学育英プログラムの経過は、昭和時代が24年、平成が30年、令和が4年である。ご寄稿頂いた著者の高校卒業年度を見ると、昭和が12名、平成が9名で、やや前に偏っている感はあるとしても、分布としては許容範囲である。各稿の表題が目立つようにこの部分の背景に色付けを施し、昭和は青、平成は緑と色分けした。何らかの感慨をおもちになる向きもあるかも知れない。

新型コロナ禍の中、昨年は春季研修会は6月27日に、秋季研修会は10月30日、11月1日の両日、いずれもWEB方式で実施した。秋季研修会では3年生幹事5名が分担して「社会の多様性」と題する発表を行った。身近な問題とあって質疑が弾んだ。関東以遠に在住の関係者のオンライン参加もあった。例年通り研修会報告を本冊子に掲載した。WEB研修会の設営から研修会報告の監修まで宮廻裕樹評議員の多大なご尽力があったことを特記しておきたい。

コロナパンデミックの終息が見えない中でのロシア／ウクライナ戦争の勃発は、文明の岐路に立つ人類の苦悩を一層深めることになった。裏表紙に掲載のウクライナ女性の掲げるプラカードの写真は、この戦争の深奥に触れた一言のようにも思える。

(安部明廣、村上健、足立潔、柴田直哉、長崎卓、吉原泰子)



ロシア・ウクライナ戦争の深淵
(<https://images.pexels.com/photos/11312762>)

2022年度（公財）祈月書院役員

理事

安部明廣（代表）、村上健、足立潔、今村一夫、柴田直哉、吉原泰子、古津弘也

監事

河原一郎、西田敦成、関口依里

評議員

伊藤勝教、多久和祥司、熊野嘉郎、長崎卓、高橋美樹、渡部文夫、新宮智子、
吉清恵介、高尾康太、宮廻裕樹、小林征男、安部素嗣、數藤由美子、八巻知香子、
小川大輔

祈月書院報編集担当役員

安部明廣 aabe34@xc4.so-net.ne.jp
〒223-0062 横浜市港北区日吉本町6-27-12
足立潔 cooljapon@gmail.com
村上健 murakami@tsuda.ac.jp
柴田直哉 shibatan21@gmail.com
吉原泰子 taiko_y@nifty.com
長崎卓 taknagasaki@pg.itsudemo.net

祈月書院研修会担当役員

安部明廣 aabe34@xc4.so-net.ne.jp
村上健 murakami@tsuda.ac.jp
柴田直哉 shibatan21@gmail.com
宮廻裕樹 hiroki38.zak@gmail.com